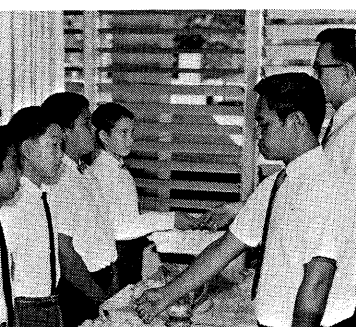
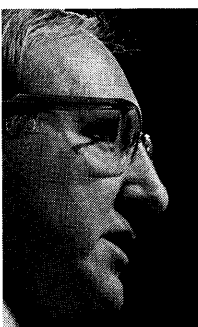






p. 253



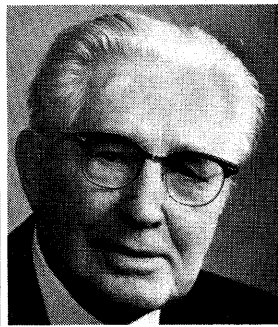
p. 276



p. 253



p. 269



p. 257

末日聖徒イエス・キリスト教会

1976年 6月号

大管長会

スペンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
デルバート・L・ステイプレー
リグランド・リチャーズ
ハワード・W・ハンター
ゴードン・B・ヒンクレー
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・パッカー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ペリー
デビッド・B・ヘイト

諮問委員会

ハワード・W・ハンター
デビッド・B・ヘイト
ロバート・D・ヘイルズ
O・レスリー・ストーン

教会誌編集主幹

ディーン・L・ラーセン

国際機関誌

ラリー・ヒラー (編集主幹)
キャロル・ラーセン (編集副主幹)
ロジャー・ギリング (デザイナー)

「聖徒の道」

八木沼 修 (日本語コーディネーター)

も く じ

改宗者の教会	スペンサー・W・キンボール	249
聖餐の誓約	メルビン・J・バラード	251
日々の恵み		255
ヒュー・B・ブラウン長老	ヘドウィン・ブラウン・ファーマー	257
エルレイ・L・クリスチャンセン長老		260
小さなお友だちへ	ニール・A・マックスウェル	261
きせかえにんぎょう		263
みんなのにわ	ルーシー・パー	264
ヤンのともだち	ジェイ・バートン	266
おもちゃばこ		268
最初さえてきたら	パティ・ウイルトバンク	269
教会福祉活動	ビクター・L・ブラウン	270
福祉生産配送部	H・パーク・ピーターソン	273
なすべきことは多い	スペンサー・W・キンボール	274
福祉活動開発部	ボーン・J・フェザーストーン	276
ローカルニュース		278

今月の表紙

ケネス・ライリー画

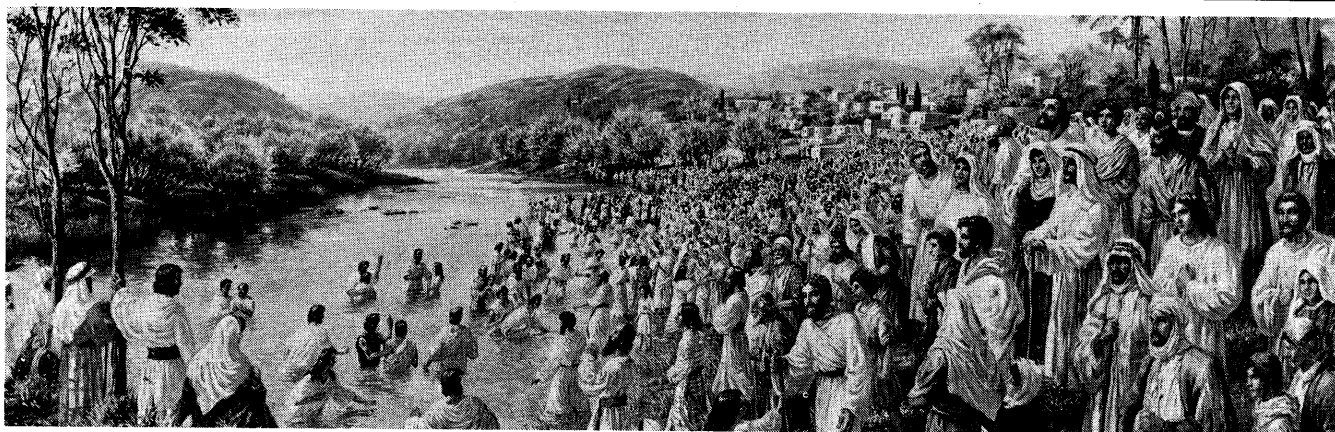
聖徒の道 6月号

発行所	末日聖徒イエス・キリスト教会 東京都港区南麻布 5-8-10
配 送	東京ディストリビューション・ センター 東京都港区南麻布 5-10-25
定 価	年間予約1,700円 1部 150円 海外予約1,700円

INTERNATIONAL MAGAZINE Printed in Japan

改宗者の教会

大管長
スベンサー・W・キンボール



教会の全成人会員にとって、聖典を徹底的に読み、研究する決意を固めることは、実に大切である。これ以上たになることは、ほとんど思いあたらない。

それは私たちの家庭や結婚生活、子供、教会での召しや働きに、いかに大きな影響を及ぼすことであろう。これを行なうときに、教会の集会やクラスは、さらに強い証のみたまと、福音の原則と教義を理解するさらに強いみたまに満たされることであろう。教義をよく理解するにつれて、私たちは救いをもたらす永遠の原則を自分の生活に応用したいと思うようになるのである。

私たちはもしこの価値ある目標の実現を根気強く、誠実に毅然として求めるならば、自分の問題に真実の答を見出し、心に平安を得ることであろう。これは私が幾星霜を経て学んだことである。私たちは理解力を増して下さる聖霊を身をもって感じ、新しい見識を得、聖典の奥深い意味を知るであろう。そして、主の教えはかつて思いも及ばなかった深い意味を持つものとなる。その結果、私たちは自分と家族を導くさらに大いなる知恵を持ち、福音を分かち合わなければならない教会外の友人たちに対して、光となり、力の源となることのできるのである。

「聖典を調べなさい。あなたがたは、聖書の中に永遠の命があると思って調べているが、この聖書は、わたしについてあかしをするものである。」（欽定訳ヨハネ5：39）私は子供の頃に、初期の使徒たちや兄弟姉妹の感動の物語を読んで、強い印象を受けたことを覚えている。まだ執事にもならないほんの少年の頃、屋根裏部屋へ通じる曲がり階段を登って行ったら、部屋と言うにはお粗末な暗い屋根裏で、毎晩毎晩石油ランプのあかりを頼りに聖書を読んだものである。ペテロに心を動かされたことを今でも覚えて

いる。ペテロはことに力強い、まさに選ばれた指導者だった。あらゆる時代を通じて最大の指導者、予言者のひとりと呼ぶべき、大いなる信仰と知識、高潔さ、そして豊かな人間愛と理解に満ちた人物であった。

その初期の時代の話を読んだときに、あなた方は自分の姿をそこに描いたのではないだろうか。ある日宮の門に入って行くペテロとヨハネのそばに自分がいる。ペテロ、ヨハネの前に、「生れながら足のきかない男が、かかえられてきた。この男は、宮もうでに来る人々に施しをこうため、毎日『美しの門』と呼ばれる宮の門のところに、置かれていた者である。彼は、ペテロとヨハネが、宮にはいつて行こうとしているのを見て、施しをこうた。ペテロとヨハネとは彼をじっと見て、『わたしたちを見なさい』と言った。彼は何かもらえるのだらうと期待して、ふたりに注目していると、ペテロが言った、『金銀はわたしには無い。しかし、わたしにあるものをあげよう。ナザレ人イエス・キリストの名によって歩きなさい』。こう言って彼の右手を取って起してやると、足と、くるぶしとが、立ちどころに強くなって、踊りあがって立ち、歩き出した。」（使徒3：1-8）

「わたしにあるもの」。私たちはこの言葉をよく考えてみなければならない。私たちにも、人に分け与えるべきものがあるだろうか。確かにある。私たちにはイエス・キリストの福音、平和の福音、喜びの福音がある。人をより良く、満たされた者とし、結婚をより幸せな楽しいものとし、家庭をさらに天国に近いものとするところのできる真理がある。私たちには、自分の家庭と生活、さらに他人の生活をも祝福する神権の力がある。然り、私たちが受けているこれらのものをさらに強力に進めて行くべき場は、自分自身

であり、家庭であり、定員会やクラスや教会の責任である。また、「わたしたちにあるものをあげよ」と、今言われている相手は、教会員でない隣人や友人である。主は私たちにそうせよと命じられた。私たちは歩みを早めて、今それを行わなければならない。

私はパウロの働きを読むたびにいつも胸を打たれる。新たな土地キプロスや、現在トルコ、ギリシャ、イタリアとなっている国々に福音が伝えられたことを読むと、あらゆる民に福音の影響が及ぶことがひしひしと感じられる。主のみこころにかなう時機にパウロが示現を見たことを覚えているであろう。「夜、パウロは一つの幻を見た。ひとりのマケドニア人が立って、『マケドニアに渡ってきて、わたしたちを助けて下さい』と、彼に懇願するのであった。」(使徒16:9) 私たちの時代でも同じである。マケドニア人の精神が今、私たちを取り巻いている。主の時刻表では今が、これまで以上に広く福音を伝える時である。地理的にも、また密度の濃さにおいても。世界の大勢の民が、意識のいかに問わず、「来て下さい。助けて下さい」と叫んでいる。それはあなたの隣人であるかもしれない。友人かもしれない。親戚かもしれない。昨日会ったばかりの人かもしれない。私たちは、彼らに必要なものを持っている。ペテロのように、研究と祈りから新たな勇気を得ようではないか。「主よ、いま……僕たちに、思い切って大胆に御言葉を語らせて下さい」(使徒4:29)と言ったペテロのように。

ペテロのなした業について読み、ステパノやピリポ、バルナバの素晴らしい働き、パウロの勇氣ある働きを知り、今日の大勢の立派な聖徒たちと同様、彼らが常に福音の開拓者として仕えていた様子を知るときに、私はいつも心を奮い立たせ、教訓を得るのである。私はこれらの立派な指導者たちの説教を読みながら、彼らがその時代の諸問題に取り組むときに主の靈感を授けられたことを知った。

古代の教会のたくさん支部に実った友情や兄弟愛を感じることは喜びである。そこには互いの永遠の幸福を気づかい、互いの物的福祉を思いやる気持が存在した。おそらくは、今の時代に兄弟、姉妹と呼び合う美しい親愛の関係とちょうど同じように、そこには親しい関係があった。

私はよくこう考える。古代の教会員は皆、教えられた通りに互いを兄弟姉妹として本当に受け入れていたのだろうか。古代の教会は新しい教会員の集まりであった。すべてが改宗者であった。教会に入って1年の者も10年の者も20年の者も、彼らはいつも互いに愛をもって親しく交わっていたのであろうか。「バルテヤ人、メジャ人、エラム人」「メソポタミヤ、ユダヤ、カパドキヤ、ポントとアジア、フルギヤとパンフリヤ、エジプトとクレネに近いリビヤ地方などに住む者もあるし、またローマ人で旅にきている者、ユダヤ人と改宗者、クレテ人とアラビヤ人」(使徒2:9-11)その彼らが、国籍や教育や地位でねたみ、そねみ、差別の心を全く持たずに、兄弟愛をもってみな一緒に働いていたのであろうか。確かにその通りである。主がゲッセマネに赴く前の最後の時に、「わたしのいましめは、

これである。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい」(ヨハネ15:12)と教えられた理由は、私たちにも明らかである。

この教えは、今日の私たちにもそのまま当てはまる。この教会はこれからも常に改宗者で満たされることであろう。場所がソルトレーク・シティーであろうとサンパウロであろうと、ロサンゼルス、ロンドン、東京、イタリアのトリノ、そのどこであろうと、友人や隣人の愛の努力によってキリストの羊の群れに新しく入った兄弟姉妹たち、その改宗者たちが私たちの中にいることは、主の御計画である。私たちは福音のまことの精神をもって互いに交わり、愛し合おうではないか。

パウロからピレモンにあてた短い書簡を読むと、私はいつも励まされる。それは私たちに、福音による兄弟愛の原則と精神を教えてくれる。ピレモンの僕オネシモは、主人の所から逃げ出し、ローマにいるパウロのもとにきた。パウロはオネシモを福音に改宗させ、別人として彼をピレモンに送り返した。そしてパウロはそれを機会に、このふたりに大切な真理を教えた。パウロは、僕であるオネシモには法に従うことの必要性を教え、ピレモンにはもっと大きな愛、つまり僕を自由に、自分と対等にさえるほどの愛が必要なことを説きたかったのである。「捕われの身で産んだわたしの子供オネシモについて、あなたにお願いする。

彼は以前は、あなたにとって無益な者であったが、今は、あなたにも、わたしにも、有益な者になった。彼をあなたのもとに送りかえす。

彼がしばらくの間あなたから離れていたのは、あなたが彼をいつまでも留めておくためであったかも知れない。しかも、もはや奴隷としてではなく、奴隷以上のもの、愛する兄弟としてである。とりわけ、わたしにとってそうであるが、ましてあなたにとっては、肉においても、主にあって、それ以上であろう。そこで、もしわたしをあなたの信仰の友と思ってくれるなら、わたし同様に彼を受け入れてほしい。もし、彼があなたに何か不都合なことをしたか、あるいは、何か負債があれば、それをわたしの借りにしておいてほしい。

兄弟よ、わたしはあなたから、主にあって何か益を得たものである。……わたしはあなたの従順を強く信じて、この手紙を書く。あなたは、確かにわたしが言う以上のことをしてくれるだろう。」(ピレモン10-12、15-18、20、21)

この偉大な宣教師は、何と大きな兄弟愛の精神を教えていることか。このイエスの使徒は、コリント人に対して、もしも誤解のゆえに人を神から遠ざけるようであれば、自分の食習慣をも変えようと言っている。(Iコリント8参照)

これと同じ精神を全教会の活動の中で目にし、また毎日主の王国に入ってくる人々を聖徒たちが両手を広げて受け入れ、助け、手伝い、その人たちのために祈る姿を見ることは、喜びであり励みである。教会員同士で、またこれから教会に入ってくる多くの人々のために、手を差し伸べることをやめてはならない。彼らを歓迎し、愛し、親交を深めなさい。

歴代教会幹部の説教の中から

十二使徒評議員会会員

メルビン・J・バラード

(在任：1919－1939)

聖餐の誓約



聖餐会へ出席することによって霊的な成長をはかる

主の傷ついた肉と流された血を記念して繰り返し交わす神聖な誓約とそれに伴う祝福について、特に末日聖徒に主は御自ら啓示しておられる。私たちは、贖い主御自身がその口を通して語られた誓約の言葉と、それに伴う約束の恵みとを受けているのである。私はこの誓約が神聖なものであることを感謝し、また信じている。この誓約は教会員として聖なるしるしのパンと水をいただくときに交わすものである。このしるしをいただくときはいつも、御子を常に忘れないことを御父のみ前に表明する。パンと水をいただくという行為によって、私たちはおごそかに誓約を交わす。すなわち主の戒めを守るということを行動で示すと誓い、それに同意するのである。

天父は、私たちが一度ならずしばしば共に会し、主の戒めを守り、主のみ名を再び私たちの身に受けるという誓約もしくは協定を新たにすることをもうけておられる。私は常にこの祝福された機会を霊的成長の手段と考えてきた。自らをふさわしい者にして主の晩餐の聖餐をいただくこと以上に、この目的を成し遂げるものにしてくれるものは他にない。私たちは肉体を活気づけるために食物をとる。食物をとらなければ体は衰弱し、遂には肉体がその機能を果たさなくなってしまう。同じように、霊の体のためには聖餐を受ける必要がある。この聖餐により身と霊に霊的な糧を取り入れるのである。もしも肉体の糧である食物がそのような限られた場所で限られた時間にしか与えられないとしたら、私たちは皆、必ずその場に臨むであろう。戦時中多くの国々で配給制度が実施されたことを聞いている。人々

は食糧を得るために決められた場所に集まらなければならなかった。

私たちの国でも、砂糖やその他の配給食糧を得るために人々が長蛇の列を作ったことは御承知のことであろう。戦時中はどのように食糧の供給が削減された。当時はそれが当然のことで、人々は決められた時刻に決められた場所に集まった。もし私たちが成長するために霊的な食物がどうしても必要であることを認識し感じたならば、この食物が与えられる場所に何をしておいても向くのではないだろうか。

私たちは聖餐の席に着くとき、空腹でなければならない。もしもこの世で最上の料理を用意している晩餐会の席へ満腹で出かけたならば、どんなにおいしそうなものでも食欲はわかず、あなたにとって何の価値もないであろう。聖餐の席へ着くときには、霊的成長を求め、また義に飢えかわいた状態でなければならない。

私たちはどのようにしたら霊的に飢えかわいた状態になることができるだろうか。私たちの中で安息日から次の安息日までの間に、言葉や思いや行ないによって自分の霊が傷つかなかった人はいるだろうか。私たちは自分の行為を悲しみ、赦しを受けたいと願う。また誤って他人を傷つけることもある。自分の行為を悲しむ気持ちや赦されたいという気持ちがあるとき、赦しを受ける方法はバプテスマではなく、人に告白することでもない。それは罪の悔改めである。私たちが罪を犯した人のもとへ行き、赦しを求め、それから心から聖餐のテーブルに着くのである。心から悔い改めて自らをふさわしい状態に置くならば、私たちは赦しを受け、心に霊的な癒しがおとずれるであろう。それは実際に私たちの中に起こるのである。あなたはそれを感じたことがあるはずである。私は聖餐が施されるときにみたまがそこに宿り、頭の上から足の先まで温かくなるのを感じたことがある。あなた方も霊の傷が癒され、重荷が軽くされるのを感じることができる。安らぎと幸福がおとずれるのである。それはこの霊の糧にあずかることによって受けることのできる、ふさわしくまた真に望ましい祝福である。なぜすべての人がこのような機会を受けないのだろうか。定期的に聖餐会に出席し、これらのしるしをいただき、愛する御子のみ名によって天父に捧げることのできるこの至高の礼拝になぜ参加しないのだろうか。それは私たちが聖餐についてよく理解していないからである。この祝福の必要性を感じていないからである。あるいは、このようなしるしをいただくのにふさわしくないと感じているからである。

この誓約の中で皆さんに注意を促したいことがある。ここで聖句を少し引用しよう。それは私たちの息子や娘、あるいは兄弟姉妹が聖餐の席について聖餐をいただくときにふさわしい状態でそのしるしにあずかってもらいたいからである。ふさわしくないままパンを食し主の杯を飲む者は、自分の身と霊とのろいを招くことになる」と聖句にあることはすでに聞いている通りである。主は次のように言っておられる。

「聖餐に与るに先だち会員たる者は、聖典に適える行為と信仰あらんために、すなわち主の神の前に聖き道を履み得んために、彼らが会員たる資格のあることを信仰深き行為と会話とを以て教会員および長老たちの前にて明らかに示すべし。」(教義と聖約20: 68、69)

また、パウロは次のように教えている。

「主の杯と悪霊どもの杯とを、同時に飲むことはできない。主の食卓と悪霊どもの食卓とに、同時にあずかることはできな

い。」(I コリント10: 21)

さらにもうひとつの聖典には次のように書かれている。

「われが今汝らに与うる誠命は、わが肉(のしるしなるパン)と血(のしるしなる葡萄液)とをわかち与うるときに、誰にてもこれを飲みまた食う資格なしと汝らの認むる者あらば、その者にこれを飲みまた食うことを許すべからず、と言うことなり。わが肉(のしるしなるパン)を食いわが血(のしるしなる葡萄液)を飲む資格なき者がこれを食いつ飲むとせば、かくすることによりてその者は身も霊も救われざることになるなり。よりて、ある人がわが肉(のしるしなるパン)を食ひ、わが血(のしるしなる葡萄液)を飲む資格なしと汝らの認むる者あらば、その人の食うことも飲むことも禁ずべし。」(III ニーファイ18: 28、29)

また近代の予言者に対して主は次のように言われた。

「さりながら何人にもあれ、もし罪咎あらば和ぎを得るまでこれに与らしむることなかれ。」(教義と聖約46: 4)

私たちの中に自分には資格がないと考え、またこれらの聖なるしるしのパンと水をいただくことで自らの身と霊にのろいを招くのではないかと恐れるあまり、聖餐の席に着くことを臆する人々がいる。しかし私たちはすべての末日聖徒にこの聖餐の席に着いてもらいたいと思っている。そこは自己を吟味する場であり、自己を診断する場であり、進路を修正し、生活を正して教会の教えやまた他の兄弟姉妹と調和させていくことを学ぶ場だからである。またそこは私たちが自ら裁きを下す場でもある。

ある場合には、罪を犯していながら聖餐にあずかろうと手を伸ばす人に、教会の長老たちが、「償いをするまで、聖餐を受けてはいけません」と言うことがある。しかし通常、自分が自らの裁き人となるのは自分自身である。正しく教えを理解している人であれば、罪ある状態で、あるいは兄弟姉妹に対して憎しみや悪感情を抱きながら、主の肉と血の記念をいただく特権にあずかれないことはわかるはずである。この教会を去って1週間や1カ月で背教者となる者はない。徐々にその道を歩むのである。

すべての男女にとって安全な道は、毎週安息日に聖餐の席に着くことである。私たちは1週間で教会からどうしようもないほど遠ざかってしまうことはない。自分自身をよく見つめるならば自分が犯した過ちを正せないほど遠ざかってしまうことはないのである。しかしながら、自分に罪があり、その資格がないとして聖餐を受けることを止めたとしても、長い間そのままの状態にいることはできないであろう。私はその人の心に時をおかずして悔い改めようとする気持ちが生じることを確信している。末日聖徒にとって聖餐の席への道は安全の道なのである。

私は、聖餐の祝福についてよく理解していないために聖餐の儀式に参加しない者がいるのではないと言った。私はこの現世において私たちに、主が霊的成長のためにこの教会に対して教えて下さった神聖なまた恵み深き事柄の価値が本当に理解できるのかどうかいぶかしく思っている。人が決して与えることのできない恵みを約束されているこの儀式の場合は特にそうである。これは、ただ主のみがその子供たちに悟らすことのできるものである。

聖典には、神はその独り子をたもうほどにこの世を愛して下さったので、主を信じ主の戒めを守る者はすべて救いにあずかると書いてある。しかしながら、この聖餐についてはそれほど代価が要求されていない。これらの栄えある特権のすべてが無償で与えられているのである。私はアメリカのある偉大な作



家の言葉を思い出す。「悪魔の店では何でも売っているが、くず1オンスも金1オンスも同じ値段である。」

犠牲となるのは天だけである。要求に応じられるのは神のみである。私たちはこの贖いと犠牲のために、恐らく何も与えるものはないであろう。しかしながら、だれかが何かを支払わなければならないのである。この地上にいる間私たちを救い、私たちに霊の糧を与え、さらに永遠の世界において共に住む備えをさせるために愛する御子、その任務にふさわしい天父の御子を贈り物として私たちにお与えになり、この世を贖うためにその命を捧げさせたもうことは、何と偉大なる愛であり犠牲であったことだろうか。

私はアブラハムが息子イサクを犠牲として捧げた物語を読むときに、この物語を通して、天父が御子をこの世のためにお送り下さったその代価の大きさを私たちに知らせて下さっているような気がする。あなた方はアブラハムの息子がどんなに待ち望んだ末に与えられたかをよく御存知であろう。父祖アブラハムにとって息子イサクは何にも増して貴重な存在であったに違いない。しかし彼らが喜びの只中にあるときに、アブラハムはこのひとり息子を主に犠牲として捧げるように告げられたのである。アブラハムはこれに応じた。あなた方はこのときのアブラハムの心を理解できるだろうか。あなた方は自分の息子をアブラハムと同じように愛しているはずである。恐らくアブラハムほどではないかもしれない。なぜならアブラハムの場合は状況がかなり特殊だったからである。サラに別れを告げるときにアブラハムの心に去来したものは何だったであろうか。犠牲を捧げる場所へ向けて3日の旅に出るイサクが母親に別れを告げるのを見たアブラハムの心境は、一体どのようであっただろうか。私は恐らく深い落胆と非しみの気持を禁じ得なかったのではないかと想像する。ふたりは指示された地へ向かって3日の間歩き続けた。イサクはいけにえを燃やすためのたき木を背負っていた。そして山のふもとまで来てアブラハムとイサクは休息を取り、従ってきた者たちをそこに残して山へ登った。そのときイサクはこのように言った。「お父さん、いけにえを燃やすたき木はありますが、いけにえはどこですか。」

この言葉はアブラハムの心を鋭くえぐったに違いない。父を信じきっていた息子はなおもこう言う。「いけにえを忘れてきたのではありませんか。」哀れな父親アブラハムは、この約束の子を見つめ、「主が備えて下さる」と言うのが精一杯であった。

彼らは、山に登り、石を集め、その上にたき木を載せた。そしてイサクは手足を縛られ、祭壇の上にひざまずいた。真の父親なら皆そうであろうが、アブラハムは別れの接吻をし祝福と愛を息子に告げたものと思う。そして今まさに父の手にかかって死んで行かんとしている息子に対し、彼の身も霊も引き裂かれる思いであつたに違いない。準備がすべて整い、やがて刃物がさやから抜かれ、アブラハムがその刃物を振りかざしてまさに息子を打とうとしたその瞬間、主の天使の声がした。「それで十分である。」

私たちの天父はこのアブラハムと同じ気持を抱かれた。いやそれ以上であつたに違いない。天父の場合は、振りかざした手は途中で止められなかったからである。天父は、アブラハムがイサクを愛していた以上にイエス・キリストを愛しておられた。それは永遠の世界において長い間忠実かつ誠実であつた、御子であり私たちの贖い主である御方に、信頼と誉れを与え、常に共におられたからである。天父は御子を心から愛しておられた。しかしながら天父は、この愛する御子を幾百万もの臣下に囲まれた誉れある栄光の座から地球へと下ろされたのである。この差は、私たち人間の力ではとうてい理解できない。主は侮辱と虐待といばらの冠とを受けるためにやって来られた。神は園において、主が大いなる苦痛と非しみの内に叫ばれるのをお聞きになった。そのとき、主はあらゆる毛の孔から血の汗をしたたせたとされている。そして主はこう叫ばれた。「わが父よ、もしできることでしたら、どうか、この杯をわたしから過ぎ去らせて下さい。」

私は尋ねたい。子供がこの世で希望を失い、何の助けも得られずに泣き叫んでいるのを見て、何もしないでいられる親がいるだろうか。おぼれている子供を助けるために、自分は泳げないのに川に飛び込んだ母親の話や、愛する子供を助けるために燃えさかる炎の中に飛び込んで行った母親の話をよく聞く。

このような叫び声を聞くときに、平気でいられる人はいない。主は私たちに自らを救う力はお与えにならなかった。主が与えたもうたのは信仰であつた。私たちは、なさねばならぬことを甘んじて受けるのである。私たちを救う力を持ちたもうたのは主であり、また御子を受けし御子を救うことができたのは天父であつた。天父は御子を群衆の侮辱から救い出す力を持っておられた。いばらの冠が御子の頭にかぶせられたとき、天父は御子を救うことができた。御子が、ふたりの強盗と共に十字架におか

かりになり、「他人を救ったが、自分自身を救うことができない。いま十字架からおりてみよ。そうしたら信じよう」と嘲られたとき、天父は御子を救うことができた。天父は地上の声をすべて聞いておられたのである。御子が十字架を背負い、愚弄されながらエルサレムの町を引立てられて行き、その重荷のために力尽きて倒れる様子を天父は見えておられた。そして遂にカルバリの丘に着き、木の十字架におさえつけられた手足が狂える釘に貫かれ、裂けた皮膚と肉から血が流れ出るのを御覧になっていた。天父はそうした様子をすべて見ておられたのである。

このときは、アブラハムとの場合とは異なり、刃物は途中で止められなかった。愛する御子の命の血が流されたのである。そして救い主が、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」と言われるときまで、この大いなる悲痛と苦難の様子をじっと見守っておられたのであった。

このとき天父が幕の彼方でこの死との格闘の様子をもうこれ以上耐えられないというところまでじっと見守っておられたことが、私にはわかる。そして死に行く息子に別れを告げ、最後の苦悶の様子を見ないですむようにと部屋から連れ出されたあの母親のように、天父もその偉大な心を御子への愛で張り裂けんばかりにして頭を垂れ、宇宙の一角に姿を隠された。その瞬間にも御父は御子を救えたというのに。私は私たちをお見捨てにならなかったことを天父に感謝し、天父を賛美したい。天父が心に抱いておられたのは御子への愛だけではない。私たちをも天父は愛しておられたのである。私は天父がこの業を途中でやめられなかったことを感謝したい。天父は私たちを愛しておられるが故に、御子が苦しみにあわれるのをじっと耐えておられたのである。そして遂に御子は私たちの救い主、贖い主となられた。従って、もしも御子がおられなかったならば、御子の犠牲がなかったならば、私たちは地に葬られ、決して栄光を受けて主のみに戻ることはできなかったであろう。このために天父は御子を人間のために贈り物として与えるという代価を支払われたのである。

私はこの贈り物に対し、どのように感謝の気持を示すことができるだろうか。御子をお授けになることが天父にとってどれほど大きな代価であるかを知っているならば、また御子を身に受け、御子からもたらされる霊的な生活を受け入れることが欠かすことのできないものであることを知っているならば、常に聖餐のテーブルに着き、私たちに与えられた贈り物に感謝することだろう。なぜなら、神が御自身のことをねたむ神であると言われたからである。私たちがこの最も偉大な贈り物を無視し、忘れ、軽々しく扱うならば、神はねたまれるだろう。

霊的成長を遂げない者は、だれも天父のみに立つことはできないし、主イエス・キリストと交わることもできないことを私は知っている。霊的成長がなければ、神のみに行く備えができないのである。聖餐が必要である。毎週、誓約を更新しなければならぬのである。聖餐を通してもたらされる祝福が必要なのである。私は今、私が話していることが真実であることを承知している。私は主が生きたもうことを証する。そして主がこの犠牲となられた御方、私たちのために贖いの業をなさった御方であることを知っている。主はこれらのことを次の世ではなくこの世において私に示して下さい。

私は救い主の十字架上の死と復活の事実について証を得た。2年前のある経験を思い出す。私はあの出来事を決して忘れることができない。そして今晚、私はあなた方、若い兄弟姉妹た

ちにそれを話したいと思う。その証を誉れとする気持からではなく、心からの感謝の気持でこの証をのべたい。私は主が生きたもうことを知っている。私は、人が救いを見出すのは御子を通してであり、私たちはこの祝福をもたらすために捧げられた犠牲を忘れてはならないということを知っている。この犠牲は私たちが天父のみもとへ行き、義とされる備えである霊的成長の手段として与えられたものだからである。

私はフォートベックインディアン保留地で他の数名の兄弟たちと共に伝道していた。そして伝道に関するある事柄を決定するために主の導きを求めていたときのことである。私たちは行なっている業が主のみこころにかなったものであるとの証を得た。私はある晩、夢を見た。私は聖なる建物である神殿にいた。しばらく祈った後で、私は恵まれてひとつの部屋に入り栄光あふれる御方とお会いすることができると告げられたのである。そこで部屋の扉を開けると、壇のところに座っておられる御方が見えた。その御方は私が今までこの目で見ただの御方よりも栄光に満ちた御方であり、またその姿は永遠の世界におられる御方として私が想像していた姿を超越したものであった。私がどなただろうかと思って近づくと、その御方はお立ちになり、手を差し伸べながら私の方に歩いて来られた。それから私にほほえみかけ、やさしく私の名を呼びだもうた。もしこの地上に百万年生きたとしても、あのほほえみは忘れることができないであろう。この御方は私を抱き、接吻し、私の顔を胸に押しあてて祝福された。私は骨の髄まで溶けてしまうのではないかと考えたほどである。祝福が終わったので私はその方の足もとにひざまずき、その足に接吻した。私の涙でぬれたその両の足を見ると、世の贖い主であるその御方の足には釘跡が見えた。愛、慈愛、祝福、その他すべてのものをその手に持たもう主のみに立ったときの気持は、夢で見せてもらったものを実際に受けることができるのであれば、持てるもの、望むもの、手に触れるものすべてを差し出しても惜しくないほどのものであった。

聖餐にあずかるようにしようではないか。聖餐こそ私が今受けている祝福された特権である。私たちはこの世にあって戒めを守り、主を信じて祝福されたみ名を身に受け、主の模範に従って霊的な生活を送ると証し、主をたたえるよう求められている。しかしもしも天父のみに立ったときにそれを行なわなかったことに対して弁解を述べるとしたら、それは恥ずべきことではないだろうか。

私たちが青少年女たちにこのことの必要性を感じさせることができるなら、彼らも私たちも聖餐会に出席するであろう。私は、十字架上のイエスを見てはいない。いばらが突きささった額も、また釘が打ち込まれた手も見えてはいない。しかし、主がほほえみながら手を差し伸べ、「私のもとに来なさい」と言っておられることを知っている。

定められた時間に主のみもとに行こうではないか。また子供も伴おうではないか。主に忠実であることによって、この神聖な儀式を守ることにより得られる祝福、今も永遠にわたっても私たちのものとなる祝福を見出そうではないか。

☆

☆

日々の恵み

星を近く感じた夜

コリナ・N・バス
アルゼンチン

子供のとき、私は主に対して本当に深い信仰を抱いていました。イエスは両親のように身近な存在でした。また、毎年クリスマスは深い意味のある美しい時節でした。夜は輝きに満ちていて、12月に入るとさっそく「クリスマスの星」を捜し始めたものでした。幾晩も外を歩きながら、南半球のきらめく夏空を仰いだものです。星はながめればながめるほど地上に近づくように思われ、私の胸には赤子のイエスに対する愛が満ちあふれ、その誕生に対する畏敬の念で満たされました。

しかし14歳の年に、私はイエスの存在を否定する気持ちを感じて悩み、世間の方法で神を探求し始めました。聖トマス・アクイナスやカント、ヒューム、聖オーガスチン、ニーチェ、ショウペンハウエル、デカルトなど合理主義哲学の大家やその他大勢の著者の本を読み、無神論者の友人たちに囲まれて、私はやがて、限界ある人の悟性にいどむ現象と、恐怖に満ちた不可思議な世界に対する恐れゆえに人間は神を作り出したとの結論に達したのです。

私は神を物理学に置き換えました。そこにあるのは究極の科学でした。人類のなぞはすべて、やがて物理学で究明されると考えたのです。ところが、まだ心にひっかかるものがありました。幼な友達との話の中で、創造についてほとんどの疑問は論理にかなう答えが出たが、ただひとつ小さなことがひっかかる。「そもそも生命はどこから始まった

のか。生命の火をともしたのは一体何か」と、彼に話しました。

その友人は穏やかに答えました。「そうだよ。君は主の偉大さをよく知っているのさ。否定する理由を山ほど見つけながら、ちっぽけなひとつのことで、ストップじゃないか。」それは一考に値する大事なことなのですが、私はそれを拒みました。

ある日のこと、ひとりの友人が、イギリス協会の「英会話」クラスで「ふたりのアメリカ人」が英会話を教えていると教えてくれました。私は好奇心から出かけて行きました。そこでひとりのアメリカ人が、みんなが神を本当に信じたら世界中の問題が解消するという話をしたとき、私は大声で笑い出してしまいました。その宣教師たちは見るからに素朴で、教育があるとも感じられないような人々でした。けれども、私はその後も彼らのクラスに通って意地悪を続けました。

しばらくして、彼らがクラスの人たちを「ミューチュアル」のパーティーに誘うと、私はまたまた好奇心に駆られて出かけて行きました。その会では酒やタバコはなく、みんなで楽しい時間を過ごしました。その会の帰り道、私の心は奇妙にかき乱されていました。そうして結局また出かけて行きました。そのうちに、私はいつのまにやら彼らが主催するクリスマスパーティーの計画に本気で打ち込むようになっていました。支部の会員一人一人にカードを作り、クリスマスプログラムのために詩を書き、衣装を作り、キリスト生誕の背景画を描きました。何が私をそうさせたのか、全くわかりませんでした。友達とはまどい、妹は怒り、母は途方に暮れました。

そしてどたん場になって、私はイエスの母マリヤの役を割り当てられたのです。そこで、これまでに見たこともない粗末な、何から何まで手造りのステージに、古びた人形を抱いて立っていると、長年味わったことのないある種の気持が私の胸に迫ってきたのです。もしそこで頭を上げて、自分が描いた「窓」を見たら、きっと星が見え、ベツレヘムの丘が見えると、はっきり感じたのです。だれにも何も言いませんでした。でもその夜教会堂の外に出ると、星がとても近くに見えて、手を伸ばせばさわれるような気がしました。

宣教師のレッスンは知識的には私の心に訴えはしませんが、続けなくてはという気持ちがしました。そこで、モルモン経を読みました。そのとき、私はそれが真実であることを知ったのです。その2年後、私は祝福師の祝福の中で、こう告げられました。「あなたの御父は……御父のみそばで生活した記憶をとどめさせ……それゆえ、あなたは再び御父のみ声を聞くときに、それを主のみ声と知るでしょう。」そのとき、私はすべての疑問の答えを知ったのです。神は生きておられる。主権と力のすべてを持って。「輝くわれらの隊」を導かれる主は、そのみ手を伸べて、アルゼンチン・ブエノスアイレス東伝道部キルメス支部のあの小さなステージで、かたくなな心を動かして下さったのだと。



追悼の辞

ヒュー・B・ブラウン長老 (1883—1975)



「ヒュー・B・ブラウンのような人物は偶然に出るものではない。彼らは、本当の意味で約束の子である。これは1975年12月5日、ソルトレーク・タバナクルで行なわれたブラウン長老の葬儀のしめくりに、スペンサー・W・キンボール大管長が述べた言葉である。

十二使徒評議員会会員であったヒュー・B・ブラウン長老は、長期療養中の12月2日、火曜日、LDS病院で92歳の生涯を閉じた。

ブラウン長老の甥にあたる大管長会のN・エルドン・タナー副管長は語った。「両親以外で、私の一生に一番深く大きな影響を与えたのはヒュー・B・ブラウンだった。……彼の思慮深い指導と私に示してくれた大きな模範を、私は永遠に感謝するだろう。ブラウン長老とは、彼が独身の頃から家で身近に接する機会があったが、彼は誠実な

親思いの息子だった。自分の家庭を持つてからは、親切的な愛情の深い夫であり、父親であった。」

ブラウン兄弟の管理下に英国で伝道した経験のある十二使徒評議員会会員のマービン・J・アシュトン長老も、このように語る。「話す言葉は平明、雄弁だった。礼儀正しい人だったが、それでいて親しみやすかった。洗練されていたが固苦しいところはなく、確固としていながら人なつこかった。勇気を持ちつつ、しかも親切で、いつも温かな理解と貴重なユーモアのセンスで人を高めてくれていた。」

ブラウン長老は神が自分にお授けになった使命を聖霊の助けにより理解し、また生涯聖霊のささやきに頼った人であった。彼が17歳の1900年にカードストンで、そのようなひとつの出来事があった。自分の家で行なわれた結婚式

のパーティーに、「ジニーちゃん」という愛称の12歳の少女が母親と一緒に出席していた。後にブラウン長老の永遠の伴侶となった人である。ブラウン長老は後にこう書き記している。

「小さな女の子だった。金髪のカールが肩までたれて、母親のわきに恥ずかしそうに立って詩を朗唱する彼女に、深い印象を受けた。母に『いつかぼくはあの子と結婚するよ』と言うと、母は『まあ、いいこと！そうなるといいわ』と答えた。」初対面だったので彼はジナ・カードにむろん何も言わなかったし、伝道を終える5年後まではそのことを彼女に話さなかった。

もうひとつ、みたまが力強く働いた興味深い経験は、ヨーロッパで伝道中のことである。

ヨーロッパ伝道部長のヒーバー・J・グラントは、大学都市ケンブリッジの

ノーリッチ地区での責任をブラウン長老に与えた。それまでに最後の長老たちが暴徒に追われており、着任したその日からブラウン長老がひとりでそこに残る形となった。若くて経験もなく学問もないカナダのカウボーイがケンブリッジに來たという自分の現実を見、何日チラシを配っても手ごたえがないので、自分がここに送られたのは間違いだっただと感じたという。彼はすっかり意気消沈して下宿へ戻った。するとその晩、ひとりの男が尋ねて来て、自分の家族も含めて17家族が1週間前に英国教会を信じられなくなって離れたと話してくれた。その週はずっと、新しい牧師を送って下さるように主に祈っていたとのことである。その男はブラウン長老が置いて行ったチラシを見つけて、自分たちの祈りは答えられたと感じたという。その男はこう言った。「私はお願いにまいったのです。あした、私の家へいらっしゃって、私どもの新しい牧師様になって下さい。」

ブラウン長老は承諾したが、自分にその用意はないと恐れを感じた。それまでに伝道部の集会に出た経験はなく、何の訓練も受けていなかったのである。しかし彼は、「神が面倒を見て下さるという深い信仰」を持って、すぐに日夜祈りと断食を始めた。ついに約束の集会の時刻がやってくると、「死ぬほど恐かった」と彼は言う。彼は集会を「高きに栄えて」の歌で始め、全員にひざまずいてもらって祈りを捧げた。「神のみ名を呼ぶと、恐れも心配も気づかいもすべてなくなり、神が引き受けて下さると確信した。神は不思議な方法でそれをなさった。」

ブラウン長老は、終始「主が私を通して彼らに語られた」と感じながら、45分も話をしたという。集会の終りに、出席した人たちは自分たちが探し求めていた真理を教えてもらったと、口々に証した。それから3カ月の間に、その夜その場で教えを受けた全員がバプテスマを受けた。

感動的な経験が伝道中にもうひとつある。ブラウン長老が大変な病気に見舞われて、召しはあと1年残っていたが、グラント伝道部長から治療を受けるために解任を勧められたことがあった。そのとき彼は、グラント伝道部長の按手で祝福を受ければ、健康になって伝道が続けられると、確信をもって答えた。伝道部長が祝福を施すと、すぐに病は癒えてその後も再発せず、伝道がまっとうされたのである。そのような縁で、ブラウン長老はヒーバー・J・グラント大管長を尊敬し、親交を結ぶこととなり、交流は生涯続いた。

ブラウン長老が帰国すると、愛するあの女性はすでに別の男性と婚約していた。彼はその事情をアルバータのE・J・ウッドステーキ部長に相談したが、ステーキ部長は折り返し、こう返事をよこした。「ジナ・カード嬢は女性の中の宝石です。あなたがソルトレークの4月大会に来て彼女にその気持を話せば、きっと今の話を破談にして、あなたとの結婚を選ぶでしょう。」ブラウン長老はステーキ部長に言われたようにした。大会の帰途は約束を得られなかったが、その翌年の1908年に、ソルトレーク神殿でジョセフ・F・スミス大管長の司式によりふたりは結婚した。

さらにブラウン長老の一生を特徴づけるものに、勇気と決意と大きな指導力があげられる。1912年にステーキ部長会の要請で、カナダ予備軍のための末日聖徒の分遣隊を組織する前準備のため、カルガリーへ軍人教育を受けに出かけたときにその天分が認識された。

それまでオタワ市議会に、モルモンは不忠実で、ヨーロッパ戦争が起きれば英国を支持する立場は取らないだろうという報告が出されていたが、アルバータ州レスブリッジ出身の一議員が、モルモンは忠実で、ただ軍にあってもできればモルモンである指導者に従いたいだけなのだと、それに応酬した。ウッドステーキ部長は他の4人と共に

ヒュー・B・ブラウンを召して、士官養成の軍隊教育に派遣した。ブラウン長老は3年間毎週訓練を続け、中慰から大慰、ついには少佐へと進んだ。それからその5人の士官はカードストンで騎兵大隊を組織し、カルガリーで騎兵訓練を施した。1914年に戦争が勃発すると、彼は他の4人のモルモン士官と共に海外派遣の騎兵大隊を編成する命を受けた。部隊は1915年、第13海外騎馬施条銃隊に所属し、カルガリーとメディスンハットで訓練を受けた後、1916年にリバプールに上陸した。

ところがリバプールまでの途中、カナダのペタワワで、モルモンの騎兵大隊も加わっていた1,500人の部隊に暴動が発生した。緊急召集された士官たちはすぐさま武器で鎮圧することを主張したが、ブラウン長老はそれに反対し、丸腰で反乱部隊に乗り込んで行った。そして近くのテントから持ち出したテーブルの上に立ち、2時間もかけて話し合いをした。事態は深刻で、反乱が全部隊に波及して死者も出しかねない様子だったが、ついに彼は全員を各自のテントに戻るようになだめさせ、大過なく終わったのである。

戦争終結後、ブラウン兄弟は法律を学びに学窓へ戻った。学業を修め、見習い期間を終えて、1921年、弁護士資格を得た。後にソルトレーク・シティーへ移ってからは、グラナイトステーキ部のステーキ部長に召された。

1937年にはヒーバー・J・グラント大管長の召しで、英国伝道部を管理した。この召しの間に軍隊及び法曹界での経験が大きな力を発揮したに違いない。ちょうど英国滞在中に第2次世界大戦が起き、英国や欧州諸国からの宣教師引揚げに助力することができたからである。

ブラウン長老は1946年から1950年までブリガム・ヤング大学で宗教を教えその後、カナダのアルバータ州の石油開発会社の社長となった。ここで豊かな収入を得た彼は、人生の大半を教会

の召しに捧げてきたその間の借金をすっかり返済することになる。

カナダでの仕事はやりがいがあったが、人生一番の引き潮を経験したのも、この時期であろう。家族は健康だったが、彼は自分の残りの人生に主がどんなみ旨でいられるのかを、知ってはいなかった。彼はこう記している。

「1953年10月、カナダロッキー山脈に登って、油田掘りの監督をした。家族は心身ともに元気でかなりの収入もあったのに、私はずいぶんと気がめいて悩んでいた。ある朝早く山に登り、祈りで主と語った。私は主に、石油の仕事で金持になれそうだが、もし知恵ある主がそれは私や家族のためにならないとお思いなら、この仕事を終りにして下さいと話したのである。

その夜、ロッキー山脈の小屋からエドモントンまで、心が晴れぬまま霊的に低い状態で帰宅した。その晩は食事を取らずにひとりで寝室へ行き、自分は到底眠れそうもないし、迷惑をかけると思うから別の部屋で休んでほしいと妻に話した。私は夜通し悪霊と闘った。私の心に取りついた霊は、いっそ

命を奮い去られたいと願った。自殺とかはみじんも考えなかったが、主が何とかして死ぬてだてを立てて下さるようにと願った。部屋は闇に満ち、悪霊が支配していた。それがあまりにもなまなましくて、今にも自分が消え入るような感じた。明け方の3時頃、部屋を動きまわる私の気配を聞いて妻が起き出し、部屋に来てどうしたのかと尋ねた。妻はドアを閉めるなり、『まあ、あなた、この部屋には何がいるの』と言い、私は『サタンだよ』と答えた。それから後はふたりで、ほとんどひざまずいて時を過ごした。翌朝事務所に行くと、(土曜日でだれもいなかった)私はひざまづいてもう一度祈り、その悪霊から救って下さいと願った。すると平安な霊が私を満たし、私はそのことを妻に電話した。

その夜10時頃風呂につかっていると、電話が鳴って、妻が『ソルトレークからよ』と叫んだ。電話を取ると、相手の声がした。『私はデビッド・O・マッケイです。主はあなたがこれからの人生を教会の奉仕に捧げるように望んでおられます。ステイナール・リチャーズ長老が死去された後をついで、あなたが十二使徒補助になることを、今十二使徒評議員会で決定しました。』

妻と私は前の晩は眠られない夜を過ごしたが、それは恐ろしい夜だった。しかしその晩は同じように眠られなくても、喜びにあふれた夜だった。主が必要なときに、このように遠く離れた私たちにも手を差し伸べて下さることを知ったからである。』

ブラウン長老が悪霊との闘いの後に召しを受けたという話は、ジョセフ・スミスが見神の前に悪霊と闘ったことと似かよっている。霊の指導者たちの多くが、そのような経験をしていることは確かである。

その後、1958年に十二使徒に支持された彼は、1961年にはデビッド・O・マッケイ大管長から副管長に召され、J・ルーベン・クラーク・ジュニア副

管長、ヘンリー・D・モイル副管長と共に働いた。クラーク副管長の死に伴って第二副管長、モイル副管長の死に伴って第一副管長に支持され、マッケイ大管長が死去する1970年1月まではタナー副管長と共に働いて、その後は懐しい十二使徒定員会に戻った。

農夫、カナディアンカウボーイ、宣教師、軍人、弁護士、教授、実業家、教会指導者として過ごしてきた一生のほとんどの期間、ヒュー・B・ブラウンのかたわらには、彼と同じように強く、ウィット豊かで献身的な彼自身の認めるところによれば彼よりもっとみたまに感じやすい女性がいた。

夫妻は教会の召しでやむなく長期間別居したが、そのためブラウン姉妹は夫との別居や生活環境の激変、経済的な苦しみなどの連続であった。彼女はまた、両親や子供の大病を経験し、夫の名をついだ飛行士の長男が、第2次世界大戦で北海洋上に果てるなどの試練に耐えてきた。

ブリガム・ヤングとジナ・ハンチントンの孫娘、そしてカードストーン市創立者の娘であるジナ・ヤング・カードは、先祖に恥じない一生を送り、1974年12月、夫に先立った。

少なくとも一方においては彼女が12歳のときに始まったふたりの恋愛は、再びふたりが結ばれた今もなお続いている。年老いてからのこの最も慕わしい関係は、祖父を見守る人々に愛と尊敬の感涙を誘っていた。ステッキにすぎるか、息子や孫や曾孫に助けられて教会の責任から帰宅する91歳の彼は、家に近づくと、やさしくジナの寝室の窓を叩き、玄関に向かいながら叫ぶのである。「ただ今、ママ、パパが帰ったよ。」ブラウン長老は高齢と最後の病気による衰弱にも、体の許す限り、妻のベッドへ行き、66年連れ添った永遠の伴侶にキスをし、挨拶するのだった。



エルレイ・L・ クリスチャンセン長老

(1897—1975)



「ずっと以前に私は、主がそのしもべを通じて私に求めたもうすべてのことは何でも行なう、何でも差し出す用意があると、主に約束をしました。私はそのように努めてきました。」クリスチャンセン兄弟は、十二使徒評議員会補助に支持された1951年10月にこう語った。以来この言葉は彼の一生を特徴づけるものとなった。

クリスチャンセン長老の奉仕の一生は、1975年12月2日、急な最後を迎えた。心不全によるもので78歳であった。12月4日木曜日に行なわれた葬儀の席上、十二使徒評議員会のエズラ・タフト・ベンソン会長が弔辞を述べた。話を始めたベンソン長老は、クリスチャンセン長老の死は本人の願い通り、「最後の最後まで働きに忙しかった」と述べながら、こみ上げてくる感情を懸命にこらえていた。ベンソン長老は

こう続けた。「私はこの神の僕を、心から愛していました。40年来の友でした。彼はいつでも天父の仕事をしていました。」

クリスチャンセン長老が教会の召しの責任を果たすとき、その力の源は家族だった。クリスチャンセン兄弟は、1951年の10月大会で次のように話した。「私が困難な試しに遭ったときは、いつもすぐに素晴らしい妻が私を励まし子供たちが力づけてくれた。その支えが、私のこれまでの一生で得た最も心強くありがたい助けのひとつだった。家族の助けのおかげで、私たちはこのようにして自分の最善を尽くしてこられたのである。」

クリスチャンセン兄弟はユタ州メイフィールドで出生。ユタ入植の初期教会員を先祖に持つ。父親は営林署官吏も勤めた農夫で、クリスチャンセン兄

弟が後日ユタ州立農業大学に学んだのも、恐らくは父の影響に負うものであろう。彼は後にプリガム・ヤング大学、ユタ大学で学位を得た。専攻は教育学で、教師、学校の理事として長年働いている。一時期は教会の学校やセミナーでも教鞭をとった。

クリスチャンセン兄弟は結婚後まもなく、新妻と共に合衆国中部諸州伝道部のフルタイム伝道に召された。その後1937年にはテキサス・ルイジアナ伝道部伝道部長に召され、4年余りその召しにあった。

その他の教会の召しとしては監督、ステーク部長、副ステーク部長、ステーク部高等評議員、Y M M I A 会長会などである。1943年から、十二使徒評議員会補助に召される1951年まではローガン神殿の神殿長をつとめた。その後十二使徒評議員会補助のかたわら、ソルトレーク神殿長も兼任し、後には世界中の神殿のコーディネーターに任命された。

クリスチャンセン長老はチェロの名手でもあった。弦楽合奏を行ない、しばらくはユタ・シンフォニーオーケストラにも所属した。

葬儀を主宰し、最後の話を受け持ったスペンサー・W・キンボール大管長はこのように語った。「クリスチャンセン兄弟は朗らかな人でした。自分の務めを本当に楽しんでいる様子でした。彼と一緒にいるときはいつも喜びを覚えたものです。」



お友だち
な
は
た
ら
く



はたらくということ

十二しとひょうぎんかいほじょ

ニール・A・マックスウェル

わたしのお父さんと、お母さんは、ふへいをいわずに、よくはたらく人でした。そして、むだづかいをしないで、よくちょ金をしました。それで、わたしは、はたらくことがすきになりました。



お父さんは、お金をかせいだときや、何かを買ったときは、きちんとけいさんして、それをちょうめんにつけました。お母さんは、りょうりやせんたくをしました。おねえさんとわたしも、おてつだいをしました。大きくなると、だんだんせきにんのおもしろいことがふえてきました。ときには、あそびたくて、おてつだいをするのがいやになることもありました。でも、よくはたらくと、からだも、れいもせい長しました。

家には小さなうじょうがあ



って、あひるやにわとりやうしやぶたをかっていました。くだものの木もうえてあって、わたしたちはそのせわをしなければ

なりません。でも、のう
じょうでとれるたまごやミルク
や、くだものをうったお金は、
じぶんのちょ金にしてよいこと
になっていました。

みなさん、はたらかない人は、
こうふくにはなれません。天の
お父さまは、「はたらかない人
は、はたらく人のパンをたべて
はならない」とおっしゃいまし
た。世の中には、なまけている
のに、人のせわになろうとする
人がいます。でもそれは、イエ
ス・キリストのおしえに、かな
ってはいません。わたしたちは
よくはたらき、ほんとうにこま
っている人には、たべものや、
きものをわけてあげなければな
りません。

わたしは前に、むかしイエス
さまがすんでいたナザレの町に
行ったことがあります。そこに

は、今でもイエスさまのじだい
とおなじような、大工^{たいく}の mise が
あります。

イエスさまも、子どものころ
から大工のしごとをしました。
そして、たくさんのよいことを



学びました。いっしょうけんめ
いはたらくならば、わたしたち
は、よい家ぞく、よいりん人、
そしてよい人げんになれるので
す。

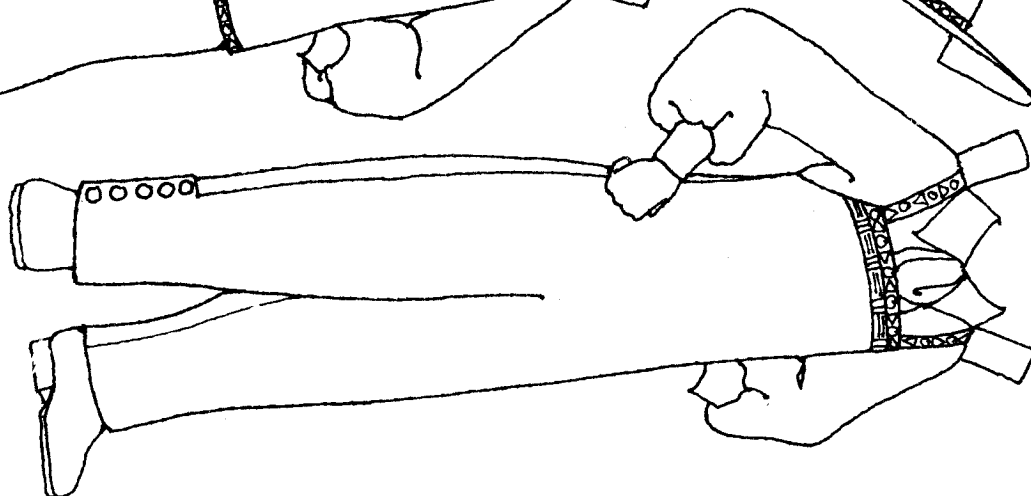
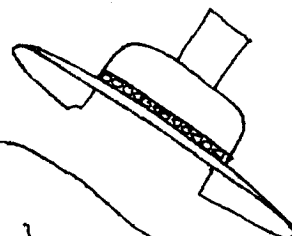
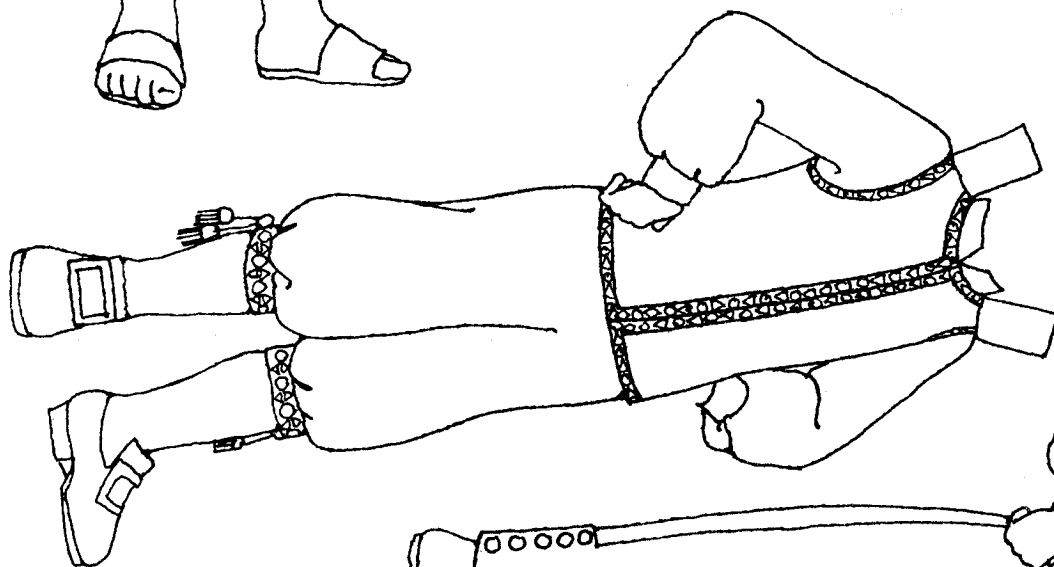
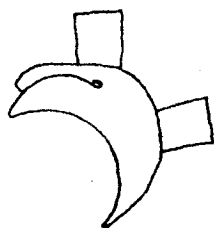
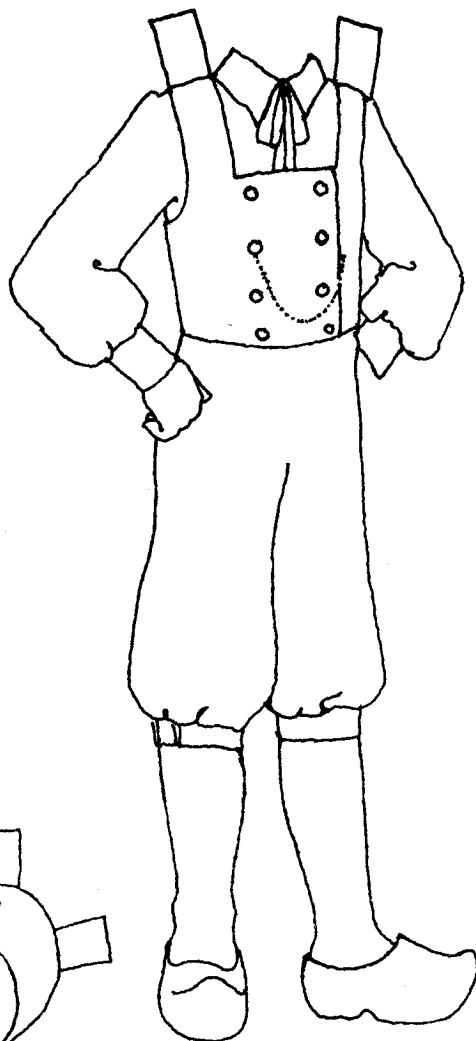
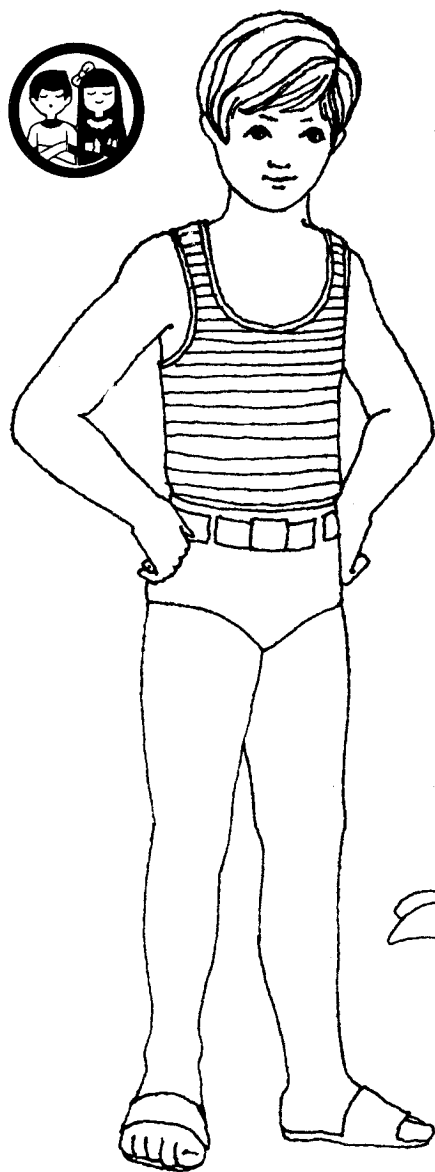
みなさん、今からはたらくし
ゅうかんを、みにつけましょう。
人によく見られるために、はた



らくのではありません。わたし
たちはりん人のために、そして
天のお父さまのためにはたらく
のです。よくはたらくならば、
この世だけではなく、天のお父
さまのところへ行っても、こ
うふくにくらすことができます。

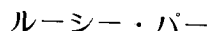
天国には、なまけものはいま
せん。天国にはしごとがたくさ
んあるので、なまけものは、天
国に行ったとしても、こうふく
にはなれないでしょう。

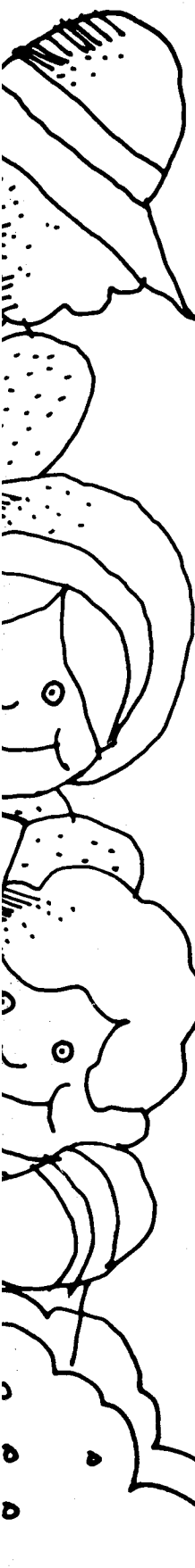




きせかえ
にんぎょう

「おとなりも、うらも、もうお花で
いっぱいよ。もう、うえるところがないわ。」





「そうかあ……。あつ、そうだ。いいことがある。」トムはいいました。

「ねえ、マッカーティーさんの家のとなり、あき地があるでしょう。あそこにうえようよ。今はゴミすてばみたいいになっちゃって、きたないけれど、きれいな花がさくようになれば、きっと、だれもゴミをすてたりしなくなるよ。」

「まあ、それはいいかんがえね。」
お母さんも、大さんせいでした。

おひるごはんがすむと、トムはうきうきしながら、あき地に行きました。あそぶことなんか、すっかりわすれていました。まずゴミをひろって、地めんをきれいにしました。

「トム、何をしているんだい。」道をとおりかかったジミーが、たずねました。

「このあき地に、花をうえるんだよ。きみもてつだいたい？」

「うん、ちょっとまって。」ジミーは大いそぎで家にかえって、シャベルとデージーのかぶをもってきました。

しばらくすると、モニカがやってきました。

「何をしているの。」

「ここに花をうえるんだ。きみもてつだいたい？」

「ええ。」モニカ也大いそぎで家へかえって、シャベルとシャクヤクのかぶをもってきました。それから、いもうとのアンドレアもつれてきました。

みんなのようすを見ていたチャドも、バラをひとかぶもって、やって来ました。

みんな、いっしょうけんめいに土をたがやし、花だんを作り、いろいろな花のかぶをうえました。

そこに、マッカーティーさんが家から出て来て、うれしそうにいました。

「みなさん、ありがとう。ここに花をうえるなんて、気がつきませんでしたよ。ほんとに、いいかんがえですね。今までは、ここをとおる人たちが、目をそむけて行ったけれど、これからはきっと、花に見とれながら歩いていくでしょう。」

トムはいいました。「どこの家のにわよりも、きれいにしようね。だって、ここはぼくたちみんなのにわだもの。」みんな、目をかがやかせて、うなずきました。



ヤンの

ともだち

おはなし

ジェイ・バートン



ヤンはきょうも、オルセンさんのところへ、牛にゅうをとりに行った。ガタガタ道で、おまけに、にくらしいドイツ人のへいたいが、たくさんいた。

ガタン！ きゅうに、荷車にぐるまの車輪しゃりんがはずれた。「あーあ、このオンボロ荷車にぐるまめ、いつまでもってくれるかなあ。」ヤンは、ためいきをついた。はずれた車輪しゃりんを荷車にぐるまにつけて、ヤンはまた荷車をひきはじめた。

ドイツぐんの、ちゅうりゅう地に来た。

ヤンは、なるべくそっぽをむいて歩いた。

「オーイ、コッチへオイデ。」 ばんぺいがよんだ。ヤンは、へいたいがいうことは、何でもしなければいけないといわれていた。

「何ですか。」

「コレハダメダ。ナオシテヤロウ。アシタ、トリニオイデ。」

へいたいは、ニッコリとわらって、ヤンのかみをなでた。ヤンは、おもい牛にゅうのカンだけをもって、家にかえった。

その夜、ヤンはせんそうに行った、パパのことばを思い出した。『ヤン、ドイツ人のへいたいも、パパがお前たちをおいて、せんそうに行くように、ドイツに家ぞくをのこして、せんそうに来ているんだよ。みんな、パパとおなじような人なんだよ。』ヤンは、ドイツ人のへいたいが大きらいだった。でも、今はパパのいったことが、よくわかった。

つぎの朝、ヤンは少し早くでかけた。

「グーテンターグ（おはよう）。ナオッタヨ。」きのうのへいたいが出て来て、いった。^{にぐるま}荷車には、あたらしい^{しゃりん}車輪がついていた。ヤンは目をかがやかせた。

「テュセンターク（ありがとう）」

「イイヤ、オジサンハ、ボウヤヲ、タスケタカッタダ。オジサンニハ、ボウヤトオナジクライノ、ムスコガイルンダヨ。」

へいたいは、しゃしんを出して見せた。

「ナマエハ、オットーダヨ。」

「さびしがっているね、きっと。」

「ソウダネ。オジサンモ、サビシインダヨ。」へいたいの目からなみだがしゃしんの上におちた。

ヤンは、パパもこの人のように、さびしがっているかも知れないと思った。

「おじさん、きつともうすぐオットーに

会えるよ。でも、それまでは、ぼくが来てあげるよ、ねっ。」

「ソレハアリガタイナ。アシタ、マタキテクレルカイ。ノルウェーゴヲ、オシエテオクレ。オジサンハ、ドイツゴヲ、オシエテアゲヨウ。」



「ぼく、まい日来るよ。」

ヤンは、いつものように、オルセンさんの家に牛にゆうをとりに行った。むねのあたりがあたたかくなって、かおもかがやいていた。

「ヤン、きょうは、たん生日なんだろう。うれしそうだね。」

ヤンは首をふった。

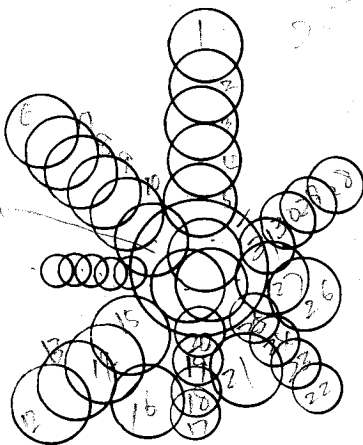
「ううん、きょうは、もっといい日なんです。あたらしい友だちができたんです。」



おもちゃばこ

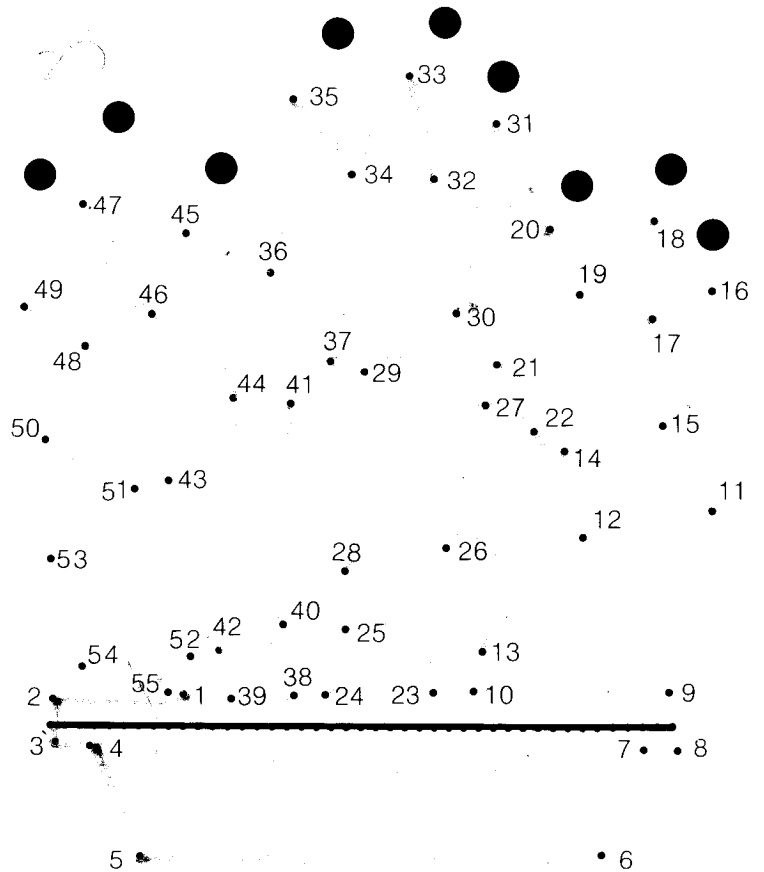
ますの中に、1から16までのすう字を入れて
たて、よこ、ななめの和が、どれも34になる
ようにしましょう。(こたえは下にあります)

1	8	13	12
1	8	10	15
14	11	2	7
9	5	16	9
15	10	3	6



わがいくつありますか。
(こたえは右にあります。)

1から55まで、じゅんばんに、てんをむすん
でみましょう。



(こたえ)

- 1れつ目 : 1, 8, 13, 12
- 2れつ目 : 14, 11, 2, 7
- 3れつ目 : 4, 5, 16, 9
- 4れつ目 : 15, 10, 3, 6
- わの数 : 40

彼女は私の親友で、小学校に入学したその日からずっと一緒だった人です。女の子たちのするようなことはみんな一緒にしてきた友だちです。でも、私は真理を知っていて、彼女は真理を知りませんでした。

福音が私だけのものではなく、彼女のものでもあること、彼女に福音を知らせてあげるのは私なのだということに気がついたのは、12年もたってからでした。

私はその仕事を宣教師に任せようと考えて宣教師たちに話をしましたが、拍子抜けしました。

宣教師は、「あなたが彼女に聞いてみて下さい。それから教えましょう」と言うのです。

教えることは何でもないことです。結局一番面倒な仕事を受け持ったのは私でした。

私は彼女に電話しました。

「こんにちは。今晚私の家に映画を見に来ない？ワード部の新しい宣教師たちが来て見せてくれることになっているんだけど。」

彼女は来ました。でも映画を見た後、別に感想を述べるでもなく家へ帰りました。

それから1週間して、長老たちが家に寄りました。「彼女にいつ福音の話をするか、決めましたか。」

「あのう、映画のことは別に何も言いませんでした。だから、また誘うのもどうかしらと思って。」

「電話で誘ってみて下さい。」ひと

りが言いました。彼は思い立ったら何も躊躇することなくどんどん行動に移していくような感じの人でした。私は長老に口答えなどできないので、ためらいがちに、震えながら受話器を取り、ダイヤルをまわしました。そんなことがどうしてあんなにむずかしかったのだろうと、今でも不思議に思います。

「私よ、チェリル。ねえ、どうかしら。……あの、長老たちが今ここにいるの。それで……ねえ、いつでもいいから、家に来て……そして教会について話を聞かない？」

長い沈黙でした。

「そうね、いいわ。行くわ。」

私はほっと息をつきました。

「いつがいい？」

「いつでもいいわよ。」

「じゃ、あしたの晩は？」

「うん、大丈夫よ。」

私は長老たちに「あしたの夜はいいですか？」と聞きました。

彼らはうれしそうにうなずきました。「いいです！」

ところが「ありがとう、チェリル」と言ったところで、彼女に釘をさされました。

「ちょっと待ってよ。パティー。私、その人たちの言うことに賛成なんてしないんだから。」

「ええ、いいのよ、それでも。来るだけね！」

「でも、口論になるかも。なんだか、いやだな。」

「賛成しなくなかったら、それでち

っともかまわないのよ。彼らだって気にしないから。」

こうして2番目の段階もすみました。彼女は、4回目の集会が終わるまで、一度も議論をしませんでした。長老たちの言うことすべてに心から同感できたのです。ところが若い方の長老がレッスンを担当した晩のことです。彼は話が終わってから彼女を見つめて、「あなたのバプテスマを、土曜日に予定したいと思うのですが、いかがですか」と尋ねたのです。

年上の長老はびっくりしました。こんなに早くバプテスマを持ち出すつもりはなかったのです。私の心臓はドキドキして、ただ息をひそめるだけでした。一瞬沈黙がありました。

「はい。」チェリルは頭を下げ、そう答えました。

私は身じろぎもせずにはいました。長老たちが彼女にお祈りを頼んだときに、私の体は震え出しました。とても簡単な素晴らしいお祈りでした。

私は頭を垂れたまま、顔を上げるできませんでした。宣教師たちもじっと黙っていました。

それから、私たちはふたりで一緒に泣きました。

「パティー」、彼女は泣き笑いをしながら「ありがとう」と言いました。

私にありがとうと言ってくれたのです。私の方こそ彼女から一番願っていた贈り物をしてもらったというのに。私の一番大切な財産、イエス・キリストの福音を受け入れてくれたのです。

最初さえ できたら

パティー・ウイルトバンク



教会福祉活動

管理監督

ビクター・L・ブラウン

各家族、個人とも、家族の備えを实践することにより自立するように努めるべきである。

兄弟姉妹の皆様、きょう私たちは、福祉活動計画を世界の隅々にまで及ぼす責任を持つ、教会の中央組織について全般的な概要を紹介したいと思う。

御存知のように、主はこれまで、いくつかの神権時代でも、必ず何らかの福祉計画を樹立してこられた。この最後の神権時代の初期に、聖徒たちには奉献の律法の下で生活する機会が与えられそして彼らは、いわゆる協同制度の下に組織された。だが、彼らがこの高い律法に従って生活することができなかったため、主は、民にその備えができるまでその実施を一時延期された。それは撤回されたのではない。きょうの私たちの話から、奉献の律法と福祉活動計画の間には密接な関係があることを理解していただきたいと願っている。

1936年10月の教会の半期総大会の席上、大管長会は、教会保全計画を発表した。この名称はその後、教会福祉計画と変更された。それ以来、教会福祉部は発展を続け、教会の各ステーク部に年間の日用品生産計画案に従って割当てを与え、日用品の生産と配送の監督をし、各地の生産事業や監督の倉庫の設立を促し、教会雇用センターの事業を監督し、デゼレト産業を設立してきた。また、こうした一連の活動の中で、教会中央福祉委員会の委員たちは、各地のステーク部や地区を訪れ、教会福祉の基本原則を教えてきた。ロムニー副管長も長年、この仕事に携わって下さった。

この期間中、またそれ以前にも、教会は他の様々な活動面で伸展を続けてきた。1919年には、ジョセフ・F・スミス大管長の指示の下に、扶助協会を通じて、里親制度と養子縁組制度が紹介された。インディアン学生紹介制度は、デビッド・O・マッケイ大管長と



スペンサー・W・キンボール長老を通じて紹介された。これは1953年のことであった。情緒的精神的に問題がある人々に対する援助活動は長年にわたって行なわれているが、この活動も1960年に正式な組織化を見た。1969年になると、これら様々な事業はマリオン・G・ロムニー、マービン・J・アシュトン両長老の指示下にひとつにまとめられることになった。また、1970年には医療事業法人が設立され、それまで教会が長年にわたって育成してきた病院制度の監督にあたることになった。またこの医療事業法人には、全世界の教会員が必要としている医療活動を援助指導する責任も与えられた。こうして活動の強化にあたった数年間、福祉部は、基本的には何らの変更もなく続いてきたのである。

1973年には、この3つの部局、すなわち、福祉、社会奉仕、保健衛生の3つが、ひとつの組織に統合された。その際、大管長会の指名により、管理監督会が中央福祉活動委員会の委員長を務めることになった。そしてそれぞれの部局に委ねられている機能を一層明確に表現するために、部局の名称が一部変更された。福祉部は、現在、福祉生産配送部という名称で呼ばれている。その長は、R・クイン・ガードナー兄弟である。この部局では引き続き、福祉活動の中の経済面で数々の責任を担う。

社会奉仕は、現在、個人福祉活動部の一部となっている。この長は、ビクター・ブラウン・ジュニア兄弟である。この部局は、本質的には、社会・情緒面での福祉と、雇用センターの維持管理に責任がある。個人福祉活動に関連して、里親制度、養子縁組制度等、法的に認可されている機関は、依然とし

て、末日聖徒社会奉仕という呼称を持ち続ける。

保健衛生は、福祉活動開発部に吸収されている。この部局はジェームズ・O・メイソン兄弟の監督を受ける。教会は現在、病院の所有や経営からは完全に手を引いており、この部局が全世界の聖徒の医療援助を見守っている。しかしながら、その主たる責任は、世界の発展途上地域における神権指導者や扶助協会指導者が教会の完全な福祉活動計画を理解し、それに従って準備することができるよう、手助けをすることにある。

以上、生産配送、個人福祉、および福祉活動開発の3部局で福祉活動が構成される。この3部局を管理指導する管理監督会は、扶助協会中央管理会会長と共に、教会中央福祉活動委員会を構成する。なお私たちは大管長会の指示の下に働いている。

ここで、扶助協会について一言述べておきたいと思う。扶助協会は、その設立当初から福祉計画と深くかかわり合いを持ち、福祉活動が今お話した他の様々な分野まで及ぶにつれてその都度極めて重要な役割を果たしてきた。私たちは、扶助協会が福祉活動に絶えず援助を与えて下さったことに対し、心から感謝申し上げる。私たちは、扶助協会の援助がなければ、この計画が極めて限られたものになってしまうことを承知している。

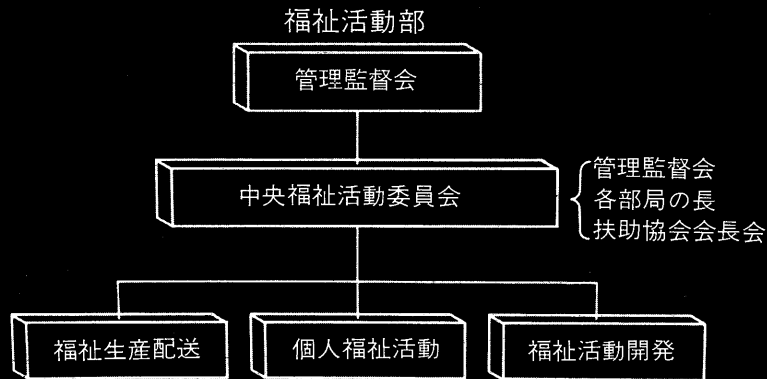
福祉活動の役割は、次のような言葉の中に述べられている。「各会員と家族に各々が必要とするものを適当な方法で自給自足させるように、神権指導者と扶助協会指導者に働きかけさせることである。そうすれば、人々は自立し、他の人々に分け与えることができるようになり、奉献の律法に完全に従う備えができるようになる。」

主は言われた。「およそ日の栄の王国の律法の諸原則によらずんば、シオンを建つこと能わず。これによりて建てずば、シオンをわれに受け入ることかなわざるなり。」(教義と聖約105:5)

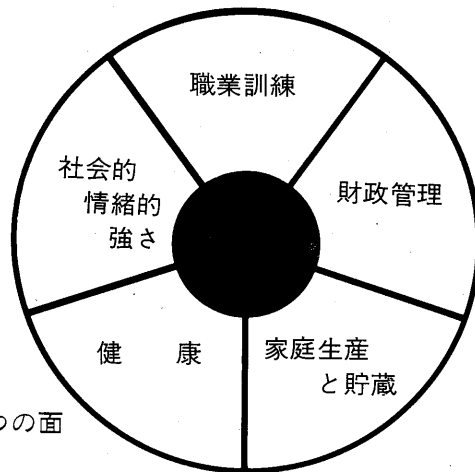
私たちは、すでに亡くなった兄弟たちの業績の上に業を進めていることを認識している。また、主がこの民に聖典を通じて与えられた警告についてもよく承知している。「見よ、こはわれ汝らを備うる準備と、わが与うる礎と範例にしてこれによりて汝らに与えられる誠命を成就すべし。」

これ、汝らに如何なる艱難下るとい

教会福祉活動部門の組織図



家族の備え



家族の備えの5つの面

えども、わが摂理によりて日の栄の世界の下に在る地の一切の生くる者の上にわが教会員の自立せんがためにして……」（教義と聖約78: 13、14）

教会の組織は、個人も家族もワード部もステーク部も地区も地域も、あらゆる段階で準備をする必要がある。私たちは、ひとつの民として一致して「日の栄の世界の下に……自立せんがため」、人生の様々な要請に応じられるよう準備しなければならないのである。

個人福祉活動

ここで、個人福祉活動についてもう少し詳しくお話ししたいと思います。まず、625名の会員を擁する標準的なワード部を設定して、その個人福祉の必要性を探ってみよう。これに使用する情報は、教会と政府の信頼できるデータに基づいたものである。数字は、合衆国内の全ワード部の平均である。私たちは、各ワード部の構成が全く様々であり、また恐らくこのワード部の平均像

に正確に一致するワード部はひとつもないことをよく知っている。しかし、この統計資料は、全世界に共通する様々な問題を反映している。

この標準的ワード部には、今年教会から援助を受けると思われる人が21名いる。その援助の内訳は、食料、衣服、燃料、実用品、家賃などである。しかしながら、他にも実際に助けを必要としている人々はいらる。

例えば、15名の家長が失業中であり、その他にも、自分の家族を扶養するに要する技術をみがいたりする必要のある人々が大勢いる。

さらに、このワード部内で少なくとも50名の家長が大きな借金をしており、そのため、毎月の収入が支出を下回ることもしばしばである。多くの場合、そのような人々は、財政管理の基本を理解していない。例えば、最近のある報告によれば、数多くの大人が正しい予算の組み方を知らないということである。

ある。

家庭生産と貯蔵に目を向けてみると、このワード部で1年以上の食糧を貯えている人が23名、242名が2カ月分以下、そして62名は全く保存食糧を持っていない。

健康の面を見てみると、このワード部には、盲児がひとりいる勘定になる。また他に重度の聴覚障害者が4名おり、9名の子供に言語障害がある。知恵遅れが4名、肢体不自由が2名、学習能力のない子供が2名いる。同様な問題を抱えた大人もいることを考えると、その数はもっと増える。

今日、神権指導者が直面している最大のチャレンジのひとつは、社会的情緒的分野における問題である。625名の会員を擁するこのワード部でも、毎年162名の会員が、引越しやワード部の境界変更で友人と別れ、慣れ親しんだ生活との断絶を余儀なくされている状態である。またこのワード部には、肉体的には障害はないものの、重度の情緒的あるいは精神的な問題に悩む子供が4名いる。また、それぞれ子供を3名ずつ持つ夫婦が2組、今年中に離婚する予定である。また、この離婚に伴い、それに付随して起こるあらゆる問題にも対処しなければならない。

今年中に2名が死亡し、1名が破門される。青少年が4名、家庭裁判所の世話になる。多くの家族が親子の断絶を経験する。また69名の女性が家族を扶養する義務を負っていないにもかかわらず、大部分は子供を家に残したまま、家庭外で職業に就く。

アルコールと麻薬に関する問題も若干あるはずである。

さらにまた、性倒錯を含む様々な道徳的背罪に巻き込まれる人々もいる。

これまで申し上げた統計は幾分極端なように聞こえることも承知している。しかしながら、これは事実をそのまま反映したものである。私たちの中で、生涯個人福祉の恩恵にあずかる必要がないと言い切れる人が、ひとりでもいるだろうか。

確かに、この標準的ワード部の個人福祉を考えた場合、神権指導者と扶助協会指導者だけでその重荷を背負わなければならないとすれば、指導者たちにとってこれは全くもって耐えられない程の重荷となることであろう。しかしながら、これは正しい方法ではない。まずこの難局に対処する責任は、個人と家族にあるのである。その後、必要に応じて、ワード部福祉活動委員会が

その家族の働きに援助を与える。

この理由から、私たちは絶えず家族の備えとワード部の備えについて話をしているのである。家族の備えは、個人福祉の問題では、自尊と自立の鍵である。

今年4月に開かれた総大会の福祉事業集会の席上、H・パーク・ピーターソン副監督が、家族の備えについて次のように説明した。「私がこれから申し上げる家族の備えとは、賢明に備えをなすことにより、予知や予測のできる事故を未然に防ぐという意味での備えである。いかに深刻な事態でも、対処の仕方いかんで、問題は軽減されるものである。」（「福祉事業集会」1975年4月5日、P.5）

家族の備えは、家族が個人の福祉にかかわる必要を満たすための鍵である。ワード部の備えといった、福祉活動の他の面は皆、家族の備えを支援するために企図されているのである。

家族の備えの一環として、個々の教会員と家族が、次の5つの分野において可能な限り自立するように願っている。その5つの分野とは、職業訓練、財政管理・家庭生産と貯蔵、健康、そして社会的・情緒的強さである。私たちの目標は、全家族を次に述べる程度にまで備えさせることである。

職業訓練。備えのできた家族では、一家の稼ぎ手は、よく準備をして自分の好みの職についている。その子供たちも、満足いく、しかも適性に合った職業に就くために準備を進めている。

財政管理。備えのできた家族では、両親が共に予算の組み方や財政管理の基本についてよく知っており、またそれをよく活用している。子供たちも実践的な経験を通じて、そのような基本的技能を教えられている。マービン・J・アシュトン長老が、この4月の福祉事業集会でこのテーマについて説教されたが、是非一読をお勧めしたい。（「聖徒の道」来月号掲載予定）

家庭生産と貯蔵。備えのできた家族には、最低1年間基礎的な必要を満たせるだけの十分な保存品がある。さらに可能な場合には、栽培、かん詰め作り、裁縫などに積極的に携わって、1年分の必需品の生産を進めている。

健康。備えのできた家族は、栄養、衛生、事故防止、医療、応急手当など、適当な予防の原則を実行している。また、医療機関の適切な利用法もよく心得ている。また、聖徒の健康について書かれた教義と聖約第89章の主の約束

にも、特に注意を払うべきである。

社会的・情緒的強さ。備えのできた家族は、義しい生活を送り、福音の研究をし、家族が愛し合うことによって、社会的・情緒的な強さを養っている。また主イエス・キリストを信じる信仰を持ち、永遠の生命を固く信じることによって、悲しみや喜び、貧困や富裕失敗や成功といった人生の避けがたい局面にも対処することができるのである。

教会員の家族が皆、家族の備えに関して以上のことを行なうよう努力するならば、人生の問題の多くは解決することであろう。この種の家族の備えを進めている末日聖徒の家族は、激変の中にあって平穏を、不確実の中にあって安全を、そして欠乏の中にあって耐久を経験するのである。

次に政府の認可を必要とする活動や専任の奉仕を必要とする活動で、家族の備えに関係のあるものについてお話ししよう。第1に社会福祉。これは、個人福祉の問題に関係した部門であって、認可を必要とする。その責任の及ぶ対象は、未婚の母親の救済活動、養子縁組、インディアン学生紹介制度、そして里親制度である。重度の情緒的、かつ精神的問題を持つ会員に対しては、医療援助も与えられる。また神権者に対するコンサルタント活動も行なわれる。

第2に雇用活動。世界中で雇用問題は、いまだかつてない程深刻化している。ワード部福祉活動委員会は、雇用問題に援助を与える責任がある。この委員会は、家族のために、しかも一家の稼ぎ手のためだけでなく、青少年のためにも活動する。この働きは、教会内の各福祉活動委員会の基本的な責任である。雇用計画と職業計画は、いくら強調しても足りない程重要なものである。

家族の備えということでこれまで述べてきた目標は、決して目新しいものではない。長年にわたって幹部の兄弟たちから教えられてきたことである。しかしながら、時のしるしを見ると、教会員は、急いでその家を整えなければならないようである。だが、これが現代に与えられた警告であるとする解釈はあたらない。救い主は、この地上でみ業を進めておられた昔、思慮深いおとめと思慮の浅いおとめのたとえ話を通じて、備えの必要なことを教えられた。

「そこで天国は、十人のおとめがそ

れぞれあかりを手にして、花婿を迎えに出て行くのに似ている。

その中の五人は思慮が浅く、五人は思慮深い者であった。

思慮の浅い者たちは、あかりを持っていたが、油を用意していなかった。

しかし、思慮深い者たちは、自分たちのあかりと一緒に、入れものの中に油を用意していた。（ここで興味深いことは、十人共、皆あかりを持っていたという点である。思慮の浅いおとめが持っていなかったのは、予備の油であった。）

花婿の来るのがおくれたので、彼らはみな居眠りをして、寝てしまった。

夜中に、『さあ、花婿だ、迎えに出なさい』と呼ぶ声がした。

そのとき、おとめたちはみな起きて、それぞれあかりを整えた。

ところが、思慮の浅い女たちが、思慮深い女たちに言った、『あなたがたの油をわたしたちに分けてください。わたしたちのあかりが消えかかっていますから』。

すると、思慮深い女たちは答えて言った、『わたしたちとあなたがたとに、足りるだけは、多分ないでしょう。店に行って、あなたがたの分をお買いになる方がよいでしょう』。

彼らが買いに出ているうちに、花婿が着いた。そこで、用意のできていた女たちは、花婿と一緒に婚宴のへやにはいり、そして戸がしめられた。

そのあとで、ほかのおとめたちもきて、『ご主人様、ご主人様、どうぞ、あけて下さい』と言った。

しかし彼は答えて、『はっきり言うが、わたしはあなたがたを知らない』と言った。

だから目をさましていないさい。その日その時あなたがたにはわからないからである。」（マタイ25：1-13）

兄弟姉妹、思慮深いおとめたちが持っていた油は奉獻の油であったと申し上げておこう。唯一の完全な福祉活動計画は、末日聖徒イエス・キリスト教会に存在する無私奉獻という永遠の律法を基礎にして行なわれるものである。

証申し上げる。これはイエス・キリストと福音である。私たちにはなすべき業がある。主は、私たちがその業を尊び、また主の計画に従い、主の方法にのっとりこの地の民に祝福をもたらすよう望んでおられる。主イエス・キリストのみ名により、これを証申し上げる。アーメン。

福祉生産配送部

管理監督会第一副監督

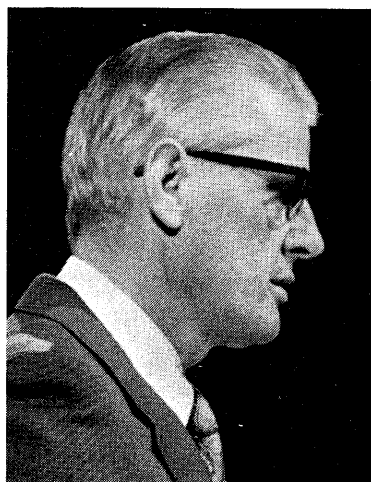
H・パーク・ピーターソン

最近の調査によれば、1年分の必需品を保存し、家族の備えをしている聖徒の数は、ほんの一握りでしかない。

従来の福祉部は、福祉活動の生産配送部の言わば先駆的役割を果たしてきた。そしてこれまでと同様、今日も福祉生産配送部は、神権役員と扶助協会指導者、ならびに全世界の教会員を援助するよう努めている。私たちは、そのような人々が神聖な義務を遂行できるように、助けを与えている。貧乏な人、困っている人、悩んでいる人、そして教会員の中で障害やその他、例えば高齢で自活できない人などの世話をしなければならないのである。

☆ ☆

ここで、細部にまでわたって理解できるように、まず福祉生産配送部の使命について、そしてそれが福祉活動全体とどう結び付いているかということについて説明することから始めたいと思う。まずその使命は、聖徒たちを外部からいかなる援助も受けずに経済的に自立させることである。それによって



末日聖徒の家族の間から貧困をなくすよう助けることである。この活動は、エノクの市、シオンの市のような社会を育成する上で多大の貢献をする。モーセの書の中から読んでみよう。「主、その民をシオンと呼びたまえり。彼ら心を一にし、精神を一にし、義に住みたればなり。されば彼らの中に貧しき者一人もなかりき。」(モーセ7:18)

末日聖徒の家族が経済的に自立できるようにするために、私たちは、父親、母親、神権指導者ならびに扶助協会指導者に、まず第一に家族の備えに焦点を合わせるよう勧めている。家族の備えの中で重要なものは、家庭生産である。かん詰め作り、園芸、裁縫、家庭用品作りなどがそれである。また、聖徒たちの必要を満たすために、1年分の食糧や衣服、可能な所では燃料をも各家庭で貯蔵するように勧めている。これは皆、父親、母親そして子供たち

が神権指導者の指示を受け入れ、将来の不測の事態に備えることによってはじめて可能となるのである。父親は所属する神権定員会を通じて指導を受け、母親はその夫から、また扶助協会の俵約生活のプログラムを通じて指導を受ける。

次の第2の焦点は、これもブラウン管理監督が話をされた教会の備えということである。この中には、ワード部の神権指導者や扶助協会指導者が、適当な生活手段を持たないワード部会員の面倒を見るということも含まれる。福祉生産配送部の主要な義務は、次のようなものである。(1)ワード部の備えを促し、食料やその他の物資の生産事業の育成に援助を与える。(2)監督が物資を必要とする家族にそれを提供できるよう、監督の倉庫の制度を管理する。(3)デゼレト産業の運営方針に指示を与え、それによって、ワード部、ひいてはステーキ部と地区を可能な限り自立させ、実際にそこに所属する会員の世話ができるように指導する。

☆ ☆

この分野についてもう少し強調するために、最近ユタ州立大学がユタ州の末日聖徒の間で行なったある調査の結果について考えてみよう。調査は4つの基本食品のグループについて行なわれた。肉類、青果類、穀類および乳製品がそれである。

その調査研究から、肉製品を1年分貯蔵している教会員は約5パーセントしかないことがわかった。乾燥品、かん詰を問わず1年分の果物か野菜を貯蔵している家庭はわずか3パーセント。1年分の穀類を貯蔵している家庭は約18パーセント。乳製品の調査では、練乳でも粉乳でも1年分保存しているのは、100家族のうち3家族しかなかった。平均すると、約30パーセントの教会員が2カ月分の食糧は貯蔵していたが、残りの70パーセントは、それ以下かあるいは全然貯蔵していなかった。

この調査統計から、大部分の教会員は月々の問題に対処する準備ができておらず、また将来の経済危機に対する備えもないことがわかる。まことに、この家庭生産と貯蔵の分野では、神権



指導者や扶助協会指導者、またすべての末日聖徒が、この家庭貯蔵に一層の重きをおき、1年分の食糧、衣服、そして可能な地域では燃料をも手に入れて保存することが、極めて大切なことである。家庭生産の分野では、私たちは、教会員が皆、予言者たちの警告に耳を傾け、可能な地域では家庭菜園を作り、自分の衣服を縫い、家庭用品を作るように、また全般的には、来たるべき日に備えてできるだけ自給自足するよう希望している。キンボール大管長はこう言われた。「現在多くの人々が庭に菜園を作り、果樹を植え、食糧保存用の容器を購入しているという報告を受け、私たちは喜んでいて。勧告に耳を傾け、それを実行しているこれらの家族に、賛辞を呈したい。

私たちは今真剣に、教会員に目を向け、儉約を実行して、基本的な日用品

を1年分貯蔵するよう教えている。」
（「聖徒の道」1975年8月号P.376）

家族の備えから、次にワード部の備えに焦点を移してみよう。この中には、生産事業も含まれる。

生産事業は、ワード部、ステーキ部および地区によって運営される非営利活動であって、その目的は、教会にいる貧困者の世話をするために、食品と日用品を供給することである。食品事業としては、農場、果樹園、酪農場、放牧場、飼料生産、かん詰工場、製パン所などがあり、非食品事業としては、敷物製作、手芸品、家具製造、裁縫業などがあり、共に教会から援助を受けている人々に、自分の能力一杯に働くなにがしかの機会を提供している。それによって、いわゆる政府の「無償」援助に頼りがちであるこの時代に、体面や尊厳を保つ働きもしている。さら

にまた、この事業は、家族が共に働き、犠牲を払い、不幸な人々を助けるために自分の労働力を捧げる機会をも提供している。

教会の福祉生産事業の大多数は1940年代に設立された。その後の50年代、60年代は、言わば地盤強化の時代であった。そしてここ数年、神権指導者は各ワード部が福祉生産事業に参加することの必要性に一段と目覚め始めている。そのため、教会の事業は増加の一途をたどり、現在その数は671に及んでいる。

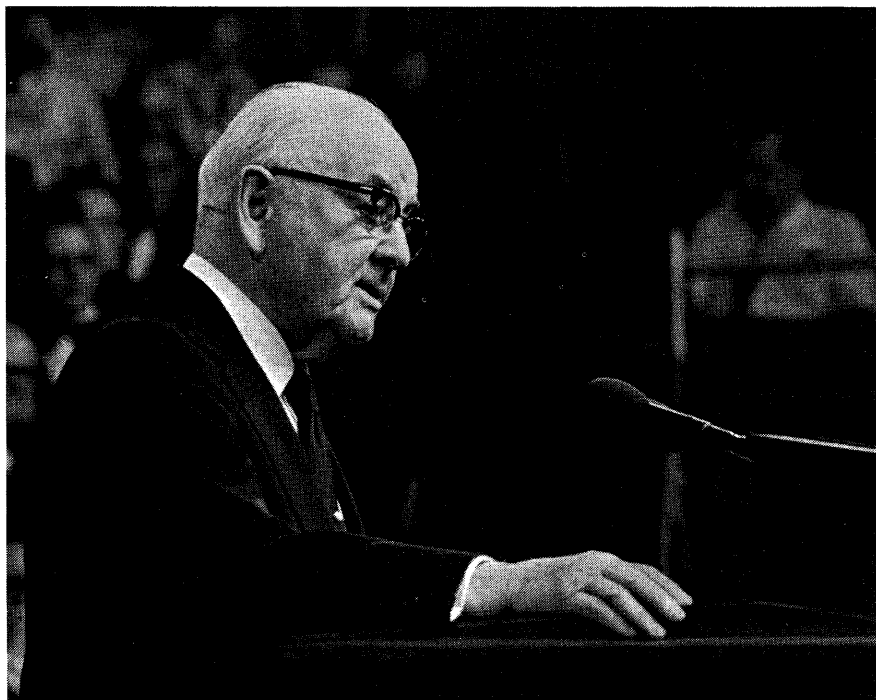
恐らく、事業数と並んで重要なのは、耕作面積であろう。現在、生産に使用されている耕地は、58,000ヘクタールである。私たちは、貧しい兄弟姉妹に食物を与えなさいという、救い主の勧告に従っている。しかしこの耕作面積では、現在、生産必需品の倉庫を利用で

1975年10月4日(土)、半期総大会福祉事業集会における説教

なすべきことは多い

大管長
スペンサー・W・キンボール

大管長からの感謝と賞賛の言葉



2、3のことについてのみお話したいと思う。まず、福祉プログラムの運営と監督に携わっておられる方々に心からの謝意を表したい。次に、なすべきことはまだまだ多い、と申し述べたい。私たちのプログラムは、さらに能率を高め、基本的な問題に対してより広範囲に適応できる可能性を持っている。第3に、私たちの敵視している人々が、私たちがこの世の人々に提供し得るこれらの多種多様かつ広範囲にわたる援助手段を目のあたりにすることを望むものである。

私たちは大いなる業を行なっている。もしも人々が私たちの努力を批判せず私たちと同様のことを行なおうとするならば、それは喜ばしいことである。

このプログラムに熱心に従事するあなた方すべてに神の祝福があらんことを。すべてのワード部、支部、ステーキ部、伝道部において、まだ水準に達していないところがあるならば、水準にまで引き上げようではないか。そして、主が望んでおられるところまで近づこうではないか。

それぞれの地に帰り、この大いなる業を遂行するにあたり、主の祝福があなたの方の上にあらんことを。イエス・キリストのみ名により、アーメン。

きる地域に住む貧困者に必要な量の確保しかできない。現在以上に困難な事態になれば、現在の消費量から推定して、教会の食糧生産事業ではとても必要な援助をすべてまかなうことはできないはずである。それゆえ、家庭生産と貯蔵を行ない、家族の備えを進めることによって、家族の大多数が自活できるようにしなければならないのである。ワード部の備え、すなわち、この中には、ワード部、ステーキ部、ステーキ部合同の生産事業も含まれているが、このワード部の備えは、自活できない人々を援助するための支援制度でしかないのである。

ワード部の備えを完全なものとするために、私たちには、まだまだ重要な仕事がある。現在、全世界にはワード部が約5,000ある。しかしながら、この5,000のワード部のうち、ワード部、ステーキ部、地区を問わず、生産事業に参加しているのは、54パーセントにすぎない。監督と神権指導者には、すべてのワード部が生産事業に参加できる態勢を整えるよう、大きなチャレンジが与えられている。

生産事業についてまとめてみよう。(1) 1教会は、現在の消費量程度ならば、貧困者を援助するのに十分な生産能力を維持している。(2) 教会は、全ワード部が事業に関心を持ち、それに参加できるよう、生産事業の拡大に努めている。(3) 教会は、家族や各教会ユニットに、可能な限り自立するように勧めている。

☆

☆

ここ数年間、断食献金の額は、それぞれ前年より15パーセントずつ増加してきた。神権指導者の呼びかけにこたえて、1975年の断食献金の額は、前年の8カ月間と比較して、47パーセントの増加を示している。指導者の皆さんは、自分の担当するユニットの進捗状況を調べてみていただきたい。私たちは、この傾向がこれからも続き、世界各地の会員たちがこれまでの何倍もの断食献金を納めるよう励ましていきたいと願っている。断食献金について、キンボール大管長は次のように言われた。「裕福なときには、物惜しみしないよ

うに心がける必要がある。そして、断食献金も2食分と言わず、その7倍でも納めるという、心の広さが必要である。」(フィルムストリップ「福祉活動の原則」)

生活必需品と燃料とは、現在、断食献金と必需品生産予算から、貧困者の必要を満たすだけの量が貯蔵されている。私たちは、すでに生活必需品を1年分保有しており、貧困者に配送する態勢がとってある。しかしながら、この物資も、需要が著しく増加すれば瞬く間に底をついてしまうことであろう。こうした事情から、家族の備えに一層の拍車をかけているのである。

他にも警告しなければならないことがある。貧困者の世話をすることは正しいことである。だが、自分の能力の限度まで働かない人に、何かを与えることは間違っている。ある家族に援助を与えながら、それを得るために能力の限度一杯まで働くことを求めないのは、主の方法ではない。無償で何かを得るような人々は、自己の尊厳と自尊心とを失う。というのも、そのような人々は言わば寄食者であり、他人の労働と努力に寄生しているからである。主はこの点に関して、極めて厳しい指示を出された。援助を受ける人々は、老いも若きも皆、その能力の限度一杯まで働くべきである。

だが統計によれば、教会の援助を受けている家族のうち、それに見合う働きをしているのは、約25パーセントにしか過ぎない。私たちは、援助を受けている家族のうち、少なくとも75パーセントは、多少なりとも自分が受けているものに見合うだけの働きをすべきであると感じている。そうすれば、霊的な強さを維持することができし、自分たちの受けた福祉援助の埋め合わせもできる。援助を受けている人々の約25パーセントは、仕事に就いていない。しかし、神権指導者が、懸命な努力を払いさえすれば、そのような人々も何かしらできるのではないだろうか。主が指定された方法に従っていないときには、私たちは神の子供たちの霊的な強さを破壊しているのである。当教会の会員は皆、自分が受けるもの

のために働く必要がある。

配送制度に関して要約しておこう。教会は、今申し上げた貯蔵量を保つよう努めている。また、監督の倉庫の数と供給力とを増やすように努めている。さらにまた、監督や神権指導者に、援助を受けている人々が能力の限度一杯まで働いているかどうかよく見守るよう勧めている。

デゼレト産業について申し上げておこう。現在、13の部門が操業中である。デゼレト産業の主要な目的は、教会員の心身障害者や高齢の兄弟姉妹たちに名誉ある雇用の機会を与えることである。デゼレト産業では、各人の労働能力に見合った仕事を与えられている。

ここには、地上で最も幸福で、最も親切で、最も平和な人々がいる。デゼレト産業のおかげで、ここで働く兄弟姉妹たちは、労働と生産に従事しているのである。無償で何かをもらっているのではない。

デゼレト産業は現在、もっと多くの部門を設立し、その中で技術や技能を教える計画を推し進め、ここで働く人々が外部の生産的な職に就けるようにすることをも予定している。デゼレト産業は「人々を自立させる」。できることならすべての会員がここで買い物をして、献金して、デゼレト産業の事業がその極めて重大な使命を全うできるよう助けていただきたいと願っている。

これまで、家族の備えとワード部の備えという分野の中で、福祉生産配送部の使命に係る活動について概略を述べてきた。この部局では、教会員が老若男女を問わず、助けを必要としている、貧困な天父の子供たちに、食料やその他の生活必需品を供給できるよう援助することにその全精力が注がれているのである。

☆

☆

兄弟姉妹の皆様、証申し上げる。もし私たちが他のことをすべてしながら、教会の困っている人々の世話をしないとしたら、「なんの役に立つか。」(ヤコブ2:14) この仕事は、その核心である。すなわちイエス・キリストの福音の中核である。イエス・キリストのみ名により、アーメン。(抜粋)

福祉活動開発部

管理監督会第二副監督

ボーン・J・フェザーストーン



福祉活動の中で、最近組織された部局である福祉活動開発部は、次のような活動を行なって、福祉活動の働きを支援する責任が与えられている。

(1)教会の発展途上地域における福祉活動の教育と実施を援助する。それによって、その地域に住む教会員たちが、家族の備えとワード部の備えの祝福にあずかることができるようにする。

(2)発展途上地域のステークス部長や伝道部長のもとに、医療、農業、その他の福祉活動宣教師を派遣する。

管理監督会には、「地の果て」まで福祉活動を広める責任が与えられている。ハロルド・B・リー大管長は、1972年4月9日に、ピクター・L・ブラウン管理監督とふたりの副監督を任命するにあたって、次のようなチャレンジを与えた。

「福祉組織の各過程が拡大されていくようにすることが、あなた方の責任です……。あなた方に与える大きなチャレンジのひとつは、どのようにすれば福祉計画が地の果ての新しいステークス部にまで導入されるかを知ることです。これは、主のすべての計画を完全に実行するためです。」

私たちはこのチャレンジを受け入れた。現在、私たちは努力に努力を重ねて、教会の発展途上地域の神権指導者や会員たちに必要な訓練を施し、事例を紹介している。できるだけ早く、また秩序正しい方法で、家族とワード部の備えを進めるためである。私たちは、1970年代に世界各地に住む神権指導者には、入念かつ広範な訓練が必要であることを認識している。この訓練は、1930年代と1940年代に、リー大管長とロムニー副管長が合衆国とカナダに住むステークス部長や監督に対して行なった訓練と同じものである。

献身的な神権指導者を入念に訓練すれば、教会は、啓示された原則に従って発展途上地域でも福祉活動計画を押し進めることができるのである。地方の指導者たちも、施しという悪を避けることについて、また断食献金の乱用を避けることについて、さらにまた、人々の現世的な要求を満たすためだけのバプテスマを避けることについて徐々に学びつつある。

現在まで、世界各地の神権指導者に数多くの必要な福祉活動の指導書類が配布されている。

「福祉活動の手引き」は、16カ国語

で翻訳済みないしは翻訳中である。

福祉活動に関する監督会訓練用の資料も準備され、翻訳され、配布されている。

教会幹部や福祉活動のスタッフは、各地を訪問して、福祉活動の原則を教える助けをしている。

福祉活動の原則は、扶助協会でも、その他の教会の教科過程の教材の中でも教えられている。

医療奉仕宣教師と農業宣教師はその数を増して、世界中に派遣されている。1971年には2名の医療奉仕宣教師が働いているだけであったが、現在では、272名の医療奉仕宣教師と農業宣教師が、34の伝道部で働いている。

これらの宣教師たちは、自己を犠牲にすることの中から、大きな霊的成長を経験している。最初の医療奉仕宣教師のひとりであったブレアー・パイビー博士の証はその良い例である。彼はサモア・アピア伝道部での任務を終わるにあたり、次のように述べた。

「神はこれまでも増して私を助け、祝福し、疑問に答え、重要なチャレンジを与えて下さいました。そして最後には、何か良いことをしたという達成感を与えて下さいました。私は自分の生涯でそれまでそのような気持を味わったことはありません。たとえ今後医師として働く機会がなくても、大学で過ごした年月や、医学校やインターンで過ごした年月は、私の医療伝道の準備期間として有意義であったと言えるでしょう。知的にも、霊的にも、情緒的にも同じことが言えます。神が私に宣教師となる機会を与えて下さったことは、私にとって驚異です。私はこのことを終生忘れません。そしていつまでも神に感謝を捧げるつもりです。」

パイビー博士の証は、福祉活動宣教師として働いている人々の情熱と霊性の良い例である。

家族とワード部の備えについて教え、実際に応用するとき、教会ではどのようなことが起こるか、お話ししよう。

バプテスマを受けたばかりのある母親がいた。彼女は、栄養失調と看護不良から最初の赤ん坊を失ったときの悲しみについて話してくれた。ところが、

彼女の改宗に伴い、大きな変化が起きたのである。彼女はどのようにすれば家族を正しく世話することができるか知った。次の子供を身ごもった彼女はこう尋ねた。「『健康なモンモルの赤ちゃん』を産むには、何をしなければいけないでしょうか。」彼女は、扶助協会が用意した育児についての特別講座を受講した。そしてレッスンに熱心に聞き入り、そこで学んだ原則をできる限り実地に応用した。やがて子供が生まれた。強くたくましく、今もって健康である。扶助協会で教えた姉妹たちを助けた医療奉仕宣教師は、地元から専任の医療伝道に召された姉妹である。この姉妹はその伝道から解任された後も、医療援助提供者として、支部福祉活動委員会を通じて地域の会員に奉仕し続けている。

医療奉仕宣教師からの手紙を読んでみよう。「私たちは、生後3カ月の赤ん坊が消化不良のため死の一步手前まで行きながら、その後回復して元気になり、丸々と太った例を目撃しました。これは、その家族が栄養の改善の重要性について学び、器具やびんの煮沸の方法を知ったからです。

また父親が指揮をとって、家族全員で働きました。井戸を掘り、沼地に排水設備を施し、野菜畑を作り、家屋を修理しました。こうして生活環境をもっと健康的なものにしたのです。」

ある立派な父親は、家族が廃物処理を安全かつ衛生的な方法で行なえるようにした。処理施設が、神権福祉活動事業の一環として建設された。その施設が完成するまで、その支部のほぼ全部の末日聖徒の家族には、衛生施設がなかったのである。

会員たちは、神権者たちから、病院など地元の適当な医療機関を利用するよう言われている。医療奉仕宣教師たちは、会員にこれらの機関の利用方法をよく理解させるよう、神権組織と扶助協会に助言を与える。重病にかかったときだけ医師に診てもらうのではなく、会員たちは、日頃から病気を予防し、子供たちの健康状態を保つよう努めるのである。

☆

☆

ある支部の農業事業で、礼拝堂に隣接した教会敷地の一部を耕作して、新鮮な野菜を生産しているところがある。その敷地にはそれまでずっと雑草が生い茂っていた。しかし、支部の神権指導者が、農業宣教師の技術指導を得てこの事業を始め、支部の会員の深刻な栄養問題の解決の一助としたのである。

子供たちも、植え付けの準備と一緒に参加し、学ぶ機会を得た。また会員たちは、土壌の水分や必要な栄養素についての基本的な農業技術を学び、それを実習した。その結果現在では、その農場で得られるとうもろこしの産出量は、以前の各会員の農場や畑での産出量に比べて何倍も多い。

他のある地域では、たん白質の不足から、子供たちに精神的、肉体的な发育障害が起こり、また死ぬことさえあったが、聖徒たちが、大豆や豚や家禽やうさぎやその他たん白質の豊かなものを育て、飼育することにより、これを克服した。農業宣教師と彼の妻が解任されて帰国した後も、この事業はなお続けられている。

これまであげた例は、教会の発展途上地域において、福祉活動の原則がいかに見事に実を結んでいるかを示す、ほんの一例にしか過ぎない。

教会はこれまで、医療伝道活動の面でかなりの経験を積んできた。また農業の面でも、これにも増して、毎日健全な農業が実践されている。職業訓練と家計改善の分野でも、私たちの仕事は、良いスタートを切ったようである。教会での奉仕のために何時間も費やしているのは、福祉活動宣教師だけではない。任地で召された同僚や援助提供者も、伝道部長や地元の神権指導者の召しに答えて、地元に住む会員たちのために働いているのである。

福祉活動宣教師も、伝道の助けをしている。医師や看護婦や栄養士や実業家や農業専門家やその他の人々を伝道宣教師に紹介して、レッスンを受けさせているのである。

☆

☆

私たちは良いスタートを切った。だが、しなければならないことはまだまだたくさんある。悲しんでいる人、悩んで

いる人の負担を軽くし、また聖徒たちを自立させなければならない。また完全な奉獻の律法に従って生活する準備として、他人に分かち合えるようにならなければならない。

兄弟姉妹たち、あなた方の助けが必要である。経験の深い、また農業や職業指導、財政管理、医療、その他の関連職業に熟練した技能を持つ夫婦を今すぐに必要としている。神権指導者の皆さん、あなた方のステーク部やワード部に、すでに子供が成人していて、世界のどこへでも医療奉仕宣教師として、あるいは農業宣教師として赴任できる夫婦はいないだろうか。私たちは、健康で、精力的で、熱意のある人々、しかも全世界で教会が進みを早めるための助けができる人を必要としている。

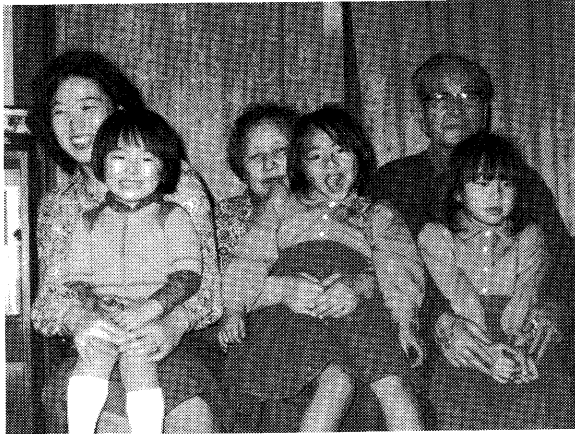
私たちは、十分な生活必需品を持たずにいる何億という天父の子供たちに対し、心からの同情を寄せると共に、是非援助の手を差し伸べたいと願っている。この教会の会員を一日も早く、家族とワード部の備えの祝福にあずかれるように高めることは、私たちの願いであり、私たちの目標である。

話の終りにあたって、マリオン・G・ロムニー副管長の言葉を読んでみたいと思う。これは、1973年4月7日の福祉事業集会でロムニー副管長が述べたものである。

「大管長会は、ビクター・L・ブラウン管理監督を、福祉事業を指揮する中央委員会の委員に指名した。この新しい機構により、途方もない責任と多種多様にわたる活動分野をかかえた教会福祉事業も相互調整されることになるのである。兄弟姉妹、私たちがこのすべての働きを、指示される通りに行なうならば与える人々は祝福を受け、受ける人々は高められるであろう。そして私たちに救い主の再降臨の備えができるのである。

私たちがそのような備えをすることができるよう、イエス・キリストのみ名により祈るものである。アーメン。
(抜粋)

私たちは、親を改宗へ 導くことができました。



父の改宗



日本東京ステーキ部 朝霞支部

小林 保夫

1975年8月8、9、10日の地域総大会は、素晴らしい祝福と感動に溢れた大会でした。しかし、別の意味で忘れられない思い出となりました。それは、私にとってこの大会が私の父の改宗のきっかけとなったからです。私たち家族（姉妹と6歳、5歳、3歳の子供たち）は、バプテスマを受けてから約1年も経過しようというのに、はっきりと教会員であることを父に話したことがありませんでした。私は、この大会が良い機会と思い、宣教師の方々と両親を訪れ、教会についての簡単な紹介と私たち家族の改宗した理由を話しました。その理由のひとつである「家庭のタペプログラム」と「永遠の家族」の概念を説明したとき、両親はその意義と私たち家族の改宗を本当に良く理解してくれました。それから、2度程この様な訪問をし、さらに詳しく教会の現況と福音の教義について理解してもらうため、大会へ招待しました。

8月9日、忘れることのできない素晴らしい一日でした。私たち家族がたくさんの祝福と恵みを受け、そして、父の心に信仰の火がとまり、さらに大きな光となったことを、昨日のように思い起こすことができます。約半年後の1月24日、父は私たち家族と同じ第2ワード部でバプテスマを受けました。今まで考えてもみないことでした。

私は、父がだれにも強制されることなく、自分の意志でバプテスマの儀式を希望したことを知り、心から嬉しく思いました。私は、70年近い間、親として、社会人としての責任を果たし、今、神の子となる父を見て流れる涙を抑

えることができませんでした。神はいつでも、忍耐強く、愛を持って迷える子羊を優しい手の内に入れて下さることを証することができます。そして、息子とはいえ、子供のとき、よく父に怒られたいたずら坊主で、社会人としても未熟な私が、父の頭に手を置き按手礼を施しました。私の祝福の言葉は、ひとりの親不孝息子から父への感謝の気持ちでした。今まで考えていた祝福の言葉の十分の一も言えませんでした。これから共に歩む福音に沿った長くて細い道程の中で、ゆっくり話すつもりです。

私は3人の子供たちに心から感謝しています。というのは、私たち家族が両親を訪れ、共に食事をするとき、必ず子供たちがお祈りをするからです。父は何回となく聞いた子供たちの飾り気のない小さな祈りが神の存在を意識させ、福音に接したいという気持ちを起こせたと話してくれました。私たち家族のみならず、両親へもこのような多くの祝福があることを本当に感謝致します。私たち家族は、父と残念ながらもまだ教会員でない母と共に、これからより良い家族として成長できるよう努力したいと思います。そして母も、いつの日か父と同じ道を歩んでくれると信じています。

私は、末日聖徒イエス・キリスト教会が真実の回復された福音に基づく教会であり、人の心を変える奇跡の教会であることを心から証致します。アーメン。

以下、私の父の証を掲載させていただきます。

幼い孫を通して真理の世界へ

日本東京ステーク部 朝霞支部

小林太茂衛

神についてだれかがいっしょに語り合ってくれなければ、だれも神について何事も聞くことができない。

神についてだれかがいっしょに語り合ってくれなければ、だれも神について何事も聞くことができない。

(ローマ人への手紙10章14、15節参照)

私は東北地方の山村に生まれ、少年期から青年期の前半をそこで生活しました。中等教育は学費が安いという理由でキリスト教の経営する学校で受けました。当然のことですが、教課の中に聖書を学ぶ時間があり、そこで聖書を通して神について知る機会がありました。

当時は、明治維新以来、怒濤のごとく押し寄せる西洋文化が正しく理解、消化されることなくただただ混乱を極めた時代でした。その中で特に社会運動、自由運動等々が否応なしに少年期、青年期の若者の心をむしばみ、彼らの中から純真な人間的従順さを奪い、いたずらに懐疑的苦悩を植えつけていったのです。このような心理的動揺の中で、私の心には人間的肉体的成長の欲望と、神を信じ、人を愛し、自らを律することの心理的精神主義との間で葛藤が生まれました。こうして神の世界における自由と、人間社会における自由との闘いの中で今日まで生きて来たわけです。これは極めて不幸なことであったと思います。

私は末日聖徒イエス・キリスト教会の会員である息子夫婦と3人の孫に恵まれております。3人の孫、ふたりの女児とひとりの男児です。

去年の夏、私共夫婦は息子夫婦の招待で南伊豆に一泊で遊びました。紺碧の静かな海とあざやかな緑の丘。騒然とした都会生活を営む者にとって3人の幼い孫にとり囲まれた旅行は実に楽しいものでした。その楽しさの絶頂は夕べの食事でした。子供たちの喜々としたカン高い呼び声に誘われてご馳走のならんだ食卓につきました。

この文章の冒頭に記しました神について荘厳な証を得たのはそのときでした。それは末孫である2歳半の男児の祈りの言葉の中から、否、その祈りの姿からでした。「天のお父様、きょうはおとうさん、おかあさん、おねえさん、常盤台のおじいちゃん、おばあちゃんとお食事を頂けることを感謝します……」私は全身に熱いものが流れるのを感じました。この感動を言葉で表わすことはできません。私は息子家族が神の教えによって幸せな生活を送っているのを目のあたりに知りました。

特別なレッスンも準備もなく、咄嗟に出た2歳半の童子の巧まない祈りの言葉。そして、神の祝福に対する純真な感謝。そこに私は、神が最も望まれる家族ぐるみの信仰の姿を見せられたのです。

私は60年間私の心のかたすみに存在し続けた神に対して贖罪を誓いました。それから私は宣教師の来宅を求めました。そして神について学ぼうと決心しました。その後すぐ

に日本地域総大会が開かれ、私も招待者として一般参加を許してもらいました。そこで私はキンボール大管長の言葉を聞きました。もちろん私には英語で話される言葉は解することはできませんでしたが、私の心の底に強く響いてくるものは、翻訳された日本語ではなく、^{りょうりょう}唳々と説かれる大管長の声でした。私の全身を駆けめぐるものは、言葉の意味ではなく、その声を通して響きわたる豊かな愛の叫びでした。その後私は宣教師のレッスンに同じ感慨を受け続けました。宣教師の片言の日本語は決して納得のゆくものではありませんでした。その言葉の意味だけでは説得力はありませんでした。しかし、神と共に生きる宣教師との対面の中から、言葉以上の神の言葉を理解することができました。

私は神権者の面接を受け、許されて1月24日午後6時にバプテスマの儀式を受けました。非常に寒い日でした。真冬の寒気の中、老人である私が、水に沈むことは常識的に考えて至難であると思ったのでしょうか、老妻は本気で止めました。しかし、私は全く不安を感じませんでした。神を信ずることができたからです。甦るということは人間の超越したところにある、この肉体は私のものではない、神のものである、そう信ずることのできた私の心は平生そのものでした。そこには寒暖はまったく関係のないことに思われました。

水に沈み息をつめたその瞬間から、私は過去の一切の罪から洗われ、神の道に生きる人間として新しく生まれたという意識をはっきりと持つことができました。立ち上がって目を開き、取り囲んで祝福してくれた兄弟姉妹を見たとき、神に贖罪をした喜びがとめどなくわいてきました。私はそこに全人類によって繰り広げられた神の世界の群像を見た思いでした。

按手礼を受ける間中、全身に感じたのは、幼かった日に母の懷に抱かれたぬくもりでした。それは布切れ一枚のへだたりもないはだのぬくもりでありました。その中で私は神のみ声を改めて聞きました。聖霊のみ声もイエス・キリストのみ声も聞きました。按手礼が終わり、目を開いて驚きました。按手礼を施してくれたのは私の息子だったので。神は、息子を通して語りたもうたのです。

私の体は感激に打ち振りました。こんな再生が私の生涯の中にあつたのか。この喜び、この感動は、言葉で表わすことはできません。これを言葉で知らせて下さるのは神様だけでしょう。

私は、これから後も多くの人からたくさん神の声を聞き、モルモン経によって家庭と家族の信仰を深めたいと思います。そして従順に自分の立場を捨て、神の言葉の通りに生きることを誓いたいと思います。このことを御子イエス・キリストのみ名を通して証します。アーメン。

新教会幹部 4 名、発表さる

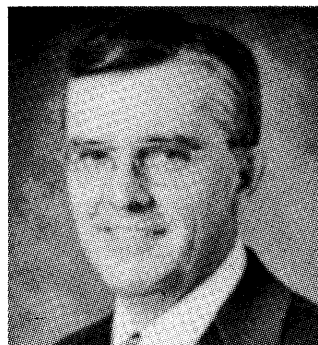
新たに 4 名の七十人第一定員会会員が、第146回年次総大会の 4 月 3 日の午後の大会で発表された。以下の通りである。この 4 名の長老たちは、教会幹部として全時間を捧

げ、世界的な規模で展開される教会伝道活動の一翼をになうことになる。

カーロス・E・

エイシー (49)

ユタ州プロボ出身、現十二使徒会地区代表兼管理監督会理事補。ブリガム・ヤング大学で教育学の教授をしていたことがある。



M・ラッセル・

バラード・ジュニア (47)

ソルトレーク・シティ出身、現カナダ・トロント伝道部長。

ジョン・H・

グローバーク (41)

アイダホ州アイダホフォールズ出身、現十二使徒会地区代表。元トンガ伝道部長。



ジェイコブ・

ディエガー (53)

オランダのナイメーヘン出身、オランダ初の教会幹部である。1972年以来十二使徒会地区代表として働いてきた。オランダ語のほかに仏、独、英、スペイン語を自由に話すことができる。

「聖徒の道」原稿募集!

本年 1 月号の新春特別誌上座談会での御要望にお応えして、編集部では広く日本全国の兄弟姉妹から原稿をお寄せいただき、ローカルページの拡充をはかることに致しました。福音に対する証、トピックス、何でも結構です。このページを日本全国の兄弟姉妹が互いに証を強め合う場としたいと思います。どしどし原稿をお寄せ下さい。要項は以下の通りです。

- 字数 400字詰原稿用紙(横書き) 5 枚以内
- 宛先 〒106 東京都港区南麻布 5-10-25 中正堂ビル
6 F 東京ディストリビューション・センター
八木沼修一

できましたら写真を添えてお送り下さい。またスペースの関係で採用できないもの、また採用のものでも編集部で添削をさせていただく場合がありますので、あらかじめ御了承下さい。

公 告

規則第18条の定める手続を経て、下記の通り教会支部用地を買収しましたので宗教法人法第22条の規定によって公告します。

昭和51年 3 月 26 日

宗教法人「末日聖徒イエス・キリスト教会」

代表役員 グレン・アール・ハンディ

会員その他利害関係人各位殿

仙台伝道本部用地	昭和50年 4 月 1 日
浦和ワード部用地	4 月 21 日
堺支部用地	6 月 2 日
静岡支部用地	6 月 24 日
小松支部用地	7 月 11 日
藤沢ワード部用地	7 月 17 日
大阪第 3 ワード部用地	7 月 22 日
名古屋伝道本部及び名古屋第 6 支部用地	9 月 10 日

1829年晩春、イエスの時代の使徒であるペテロ、ヤコブ、ヨハネが、ペンシルベニア州ハーモニーの近くを流れるサスケハナ川の岸で、予言者ジョセフ・スミスとオリバー・カウドリにメルケゼデフ神権を授けた。この重要な出来事について主はこう語っておられる。

「……わが汝らに遣わして、汝らを聖職に按手任命し汝らの使徒たること、また汝らがわが名の特別の証人たることを確認し、また汝らが導きと教えを施す働きと、わが彼らに啓示せるところと同じものとの鍵を有つことを確認せしめたるかのペテロ、ヤコブ、ヨハネの三人、すなわちわが王国の鍵と、終りの世に於ける、および天と地の両つにあるすべてのものを一つに寄せ集むべき『時満ちたる』時代に於ける福音の神権の時代とを託したる三人と共に飲み、また、わが父がこの世の中よりわれに与えたまいしすべての人々と共に飲む時来ればなり。」（教義と聖約27：12-14）

